2009-AFC
15

平成 21 年度

欧州地域（イタリア、ベルギー）における
盆栽輸出可能性調査

2010 年 3 月

日本貿易振興機構（ジェトロ）
香川貿易情報センター
農林水産部

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

はじめに

日本の伝統産品として位置づけられている盆栽は、柔道や空手が世界中に広まってスポーツ愛好家が拡大しているのと同様に、今やわが国の伝統品としてだけでなく広く海外にも愛好者が存在している。貿易統計上では、アジア諸国向け輸出が第１位であるが庭木などの種類が多いといわれている。一方 EU では、40 年前からイタリア、ベルギー、オランダ等で根強い需要がある。現地人指導者による盆栽教室の開講、愛好家クラブで活発な展示会開催など、大きなファンを獲得している。

アジア太平洋盆栽・水石大会（ASPAC, Asia Pacific Bonsai Convention & Exhibition）は 1991 年のインドネシア開催（バリ島）を第１回として 2 年ごとにアジア諸国で開催され、2009 年 11 月には第 10 回として台湾で開催された。大会終了時に次回開催地が決定される慣わしになっており、日本からは盆栽の伝統的な生産地を控えた高松市が国内関係者の同意を得て 2011 年の次回開催地に向けた誘致に注力し、高松市への誘致が決定した。

２年後に同大会が開催された場合、わが国産盆栽の伝統的、芸術的価値は世界的に認知されており、例えばオーストラリア、マレーシアなど同大会の有力メンバー国はもとより、欧州主要国の盆栽愛好家が日本を訪問して、国産盆栽を購入する可能性が強くなり、海外に向けた国産盆栽の大きな発信機会になることが期待されている。

本調査は、日本における松盆栽取引の約８割を占めるといわれる高松地域の作品を事例として、特に伝統的盆栽を指向する欧州主要市場（イタリア、ベルギー）を対象に、ジェトロ・ミラノセンターとブリュッセルセンター、並びに香川貿易情報センターが、愛好者、取扱業者との面談等による調査を実施するとともに、さらに輸入検疫制度について関連情報を収集した。

本報告書作成にご協力いただいた関係者の方々には、この場を借りて深く御礼申し上げる。本報告書が国内関係者の今後の輸出活動の一助となれば幸いである。

2010 年３月

日本貿易振興機構（ジェトロ）
香川貿易情報センター
農林水産部

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

【免責事項】

ジェトロは、本報告書の記載内容に関して生じた直接的、間接的、派生的、特別の、付随的、あるいは懲罰的損害及び利益の喪失については、それが契約、不法行為、無過失責任、あるいはその他の原因に基づき生じたか否かにかかわらず、一切の責任を負いません。これは、たとえ、ジェトロがかかる損害の可能性を知らされていても同様とします。

本報告書は信頼できると思われる各種情報に基づいて作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。ジェトロは、本報告書の論旨と一致しない他の資料を発行している、または今後発行する可能性があります。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

要旨

第１部　イタリア

イタリアに日本の盆栽が直輸入されるようになって 30 年近く経過したが、イタリアは欧州の中でも愛好家の数が多く、最も盆栽文化が普及しレベルの高い国になったと言われている。現在も名高い日本の有名盆栽作家の動向に対する注目度は極めて高く、日本からの最新情報がイタリアの盆栽業界には続々と伝わっており、日本の盆栽および盆栽技術・美学に対する関心は依然として高い。盆栽文化＝日本文化ということで、日本文化の発信やイメージアップに盆栽が果たした文化的役割は格段に高いものがある。

イタリアにおける盆栽普及は、パイオニア企業、CRESPI BONSAI がミラノで創業し、盆栽輸入を本格的に始めた 1979 年に始まる。1980 年初頭に盆栽愛好会などが誕生しはじめ、80 年代末から 90 年代はじめにかけて各地に多数の愛好会が設立されるなど、一種の「盆栽ブーム」が生まれた。普及を支えるのが、愛好家や盆栽専門家による各地での盆栽展開催などである。イタリアで実際に盆栽を育成している「アマチュア盆栽愛好家」人数は全国で約 7,000 名程度とされ、盆栽指導者（盆栽作家も兼ねる）でインストラクターとしての有資格者は全国で約 30 名が登録されている。イタリアでこれほど多くの愛好家を獲得した背景には、89 年に日本人盆栽指導者（木村正彦氏）が行ったデモンストレーションに触発され翌 90 年にイタリアで第１回欧州盆栽大会が開催され、その後 96 年には盆栽指導者の資格認定も行う専門指導者団体が発足し各地愛好クラブで指導が行われるようになったことも要因として挙げられる。

イタリアでは「盆栽」を職業的に生産する「生産者」はほとんど存在せず、販売目的に職業的に生産する生産者はいないため、盆栽市場は実質的には「輸入盆栽」といえる。2008 年のイタリアにおける「東アジア」からの「その他の生きている植物」の輸入額全体のうち、54.2%が日本からの輸入（約 350 万ユーロ）となり、調査対象品目の輸入市場では、日本が圧倒的な首位を誇っている。２位は中国で同 33.4%、３位は台湾で 7.5%である。これら３カ国で全体の 95%以上を占める。

日本からの輸入盆栽で主な市場流通品種は五葉松、トショウ、シンパク、さつき、ザクロ、柿木などである。中国からの盆栽輸入量は近年拡大しており、全体の 50%以上が「インドゴムノキ」（Ficus Elastica）　と「ガジュマル」（Ficus Microcarpa）など「フィクス」（Ficus）が占め、その他は、コトネアスター、ハクチョウゲなどとされる。モミジ・カエデを除くと、日本からの主要輸入品目とのバッティングはほとんどみられない。

イタリアの盆栽輸入・取扱業者の入荷時のコストに対して、上代（希望小売価格）の設定は２～３倍となる場合が多い。少ないところでも 1.5 倍、多いところでは４倍程度に設定されている。日本産の盆栽は、主として盆栽輸入･流通業者直営店舗で販売されている。中国製盆栽は、輸入業者が郊外型ガーデンセンターや大型ショッピングセンターに直接卸し、安価に販売するほか、花問屋を通して街角の花屋等にも流通されている。

主要輸入業者へのインタビューなどを通じて日本からイタリアへの盆栽輸出の今後の方向性で次の様な課題が浮かび上がった。

１）盆栽の病害虫の問題

日本の盆栽の病害虫の問題により人気の品種であるカエデ・モミジが輸入できないなど、日本側で病害虫の検疫をよりきちんとしてほしいという要望も少なくない。

２）日本側生産者の輸出に対する姿勢・意欲

日本の生産者側は高齢化しそれぞれ孤立し独自の道を進んでいるようで、互いの情報交流も見られない。イタリアほか諸外国の盆栽市場の動向や好み、ニーズなどを探ろうとする動きや

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

情報収集の姿勢、輸入業者と相互に対話をしてより良いオファーを出そうという意欲が感じられない。盆栽生産地で生産者同士が協力して輸出の仕組みを作るなど、産地の輸出に対する取り組みがあっても良いのではないかという声もあった。

３）イタリアの愛好者の要求する「素材」供給への対応

イタリアの「盆栽愛好家」が購入を望んでいるのは、高価で美しい盆栽の傑作ではなく、自らの盆栽を育てていくための「素材」となる盆栽である。品種は、五葉松、シンパクが中心となり、さらに、さつき、モミジ・カエデ類が人気品種となる。輸入業者もその種の「素材」となる盆栽を求める傾向が強まっている。高価で立派な盆栽は多く存在するが、このような盆栽を見つけることが楽ではないといわれている。

イタリアにおいて日本産盆栽に対する評価は高く、買いたい、育てたいという願望は多いものの、日本産の盆栽は価格が高価なこともあり、実際に購入できる者は限られている。盆栽のプロや愛好家は自生地の土着品種を用いて見事な盆栽を育てるようになり、盆栽文化の「イタリア化」が定着度を増している。その結果、盆栽文化の浸透が日本産盆栽の輸入増大には必ずしもつながらないという逆説的な現象を生んでいるため、前述の課題の克服がキーポイントといえよう。

第２部　ベルギー

2008 年 10 月 15 日、EU の欧州委員会は、オランダに輸入された庭木から害虫（ゴマダラカミキリ）が発見されたため、盆栽の輸入規制強化の緊急措置を実施する旨、世界貿易機関（WTO）に通知した。米国向けの盆栽輸入規制が一番厳しいが、欧州の対応は、同国向けレベルに近い。「ゴマダラカミキリが侵入しない網室などの施設で２年間生育されたもの」以外は 08 年 10 月以降輸入規制強化の対象となった。前述の欧州委員会の発表が日本からの対欧州輸出シーズン直前となり輸出が事実上できなくなったため、国内産地では、業者が多くの在庫を抱えるなど大きな影響を受けた。

欧州以外の国の原産で、「種子を除く植え付け用の自然にあるいは人工的に成長を抑制された植物」で、以下の様な輸出前の育成条件が課される。

－発送前に少なくとも２年間連続して、公式に登録され、公式に管理された検査制度下にある養樹場（盆栽園）で成長し、保持され、準備されたものであること。
－少なくとも上記の期間中、地面から少なくとも 50 センチメートルの高さの棚に置かれた鉢に入れられていること。
－少なくとも上記の期間中、欧州のものではない銹病がないことを保証する適切な処置を受けていること。検疫証明書に、活性成分、濃縮物、処置の適用日を記載すること。
－少なくとも上記の期間中、年に少なくとも６回、指定の有害生物の存在を探査するため公式な検査を行っていること。

ベルギーはイタリアより北方にあり、ブリュッセルが北緯 51 度近辺で極東ロシア・サハリン島のほぼ中程に相当する緯度に位置しているため、厳しい気候環境のもと１年間の日照期間がわずか３カ月間と、栽培上の大きな制約を受けている。このため、日本と同様な栽培にはコスト面での負担が厳しいため輸入品がほとんどであり、安価品（主に中国品）と高級品（日本品）に２極化した市場となっている。

ベルギーでは現在、全国に２万～３万人の盆栽愛好家が存在しているといわれる。European Satsuki Bonsai Association（EBA、欧州さつき盆栽協会）を始めとするベルギー盆栽愛好クラブは 14 件確認された。陸地続きの国境を控えているため、取扱業者はドイツ、フランス、オランダなど周辺国にも顧客を有しており、EU 盆栽市場は懐が深い印象を受ける。一般の消費者は、100～300 ユーロレベルの輸入品を利用し個人の様々なライフスタイルに溶け込ませているが、ベルギー周辺の外国人顧客は高級品を指向している。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

JETRO

目　次

【調査の背景と目的】 1

【調査対象品目】 1

第１部　イタリア 5

１．イタリアにおける盆栽の普及状況 5
（１）沿革 5
（２）盆栽愛好家の種類と特色 5

２．盆栽の生産・輸入･流通動向 7
（１）生産 7
（２）輸入 8
（３）流通 10

３．盆栽の教育機関・資格認定・定期刊行物 13
（１）盆栽の教育機関 13
（２）盆栽インストラクター 14
（３）盆栽の主要刊行物 14

４．盆栽愛好家クラブ 16
（１）愛好家クラブの概要 16
（２）イタリア盆栽クラブ連盟（UBI：UNIONI BONSAI ITALIANI）の活動 16
（３）地域の盆栽愛好会の活動　ケース事例 18
１）エミリア盆栽協会　Associazione Emilia Bonsai 18
２）ラヴェンナ盆栽愛好会　Bizantina Bonsai Ravenna 21
３）フェルトレ盆栽クラブ　Bonsai Club Feltre 24

５．輸入・取扱業者 27
（１）クレスピ・ボンサイ　Crespi Bonsai 27
（２）オルトレ・イル・ヴェルデ　Oltreil Verde s.r.l 29
（３）フランキ・ボンサイ・ヴィヴァイ　Franchi Bonsai VIVAI 32
（４）バルバッツァ・ボンサイBarbazza Bonsai Srl 34
（５）フジサト・カンパニー　Fuji Sato Company s.n.c. 37

６．有力者インタビュー 38
（１）ジョヴァンニ・ジェノッティ氏　IBS（イタリア盆栽・水石指導者会）初代会長 39
（２）ルイジ・クレスピ氏　クレスピ・ボンサイ創立者 41
（３）マウロ・ステンバーガー氏　イタリア盆栽クラブ連盟　UBI会長 42
（４）アルフレッド・サラッチョーネ氏　盆栽インストラクター 43

７．イタリアにおける日本盆栽市場　―まとめと課題― 45
（１）日本盆栽の輸入規模 45
（２）イタリアにおける日本盆栽の購入層 45
（３）イタリアにおける日本の盆栽の位置づけ 45
（４）日本の生産者側の問題点・課題 47

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

資料編（イタリア） 49
１．盆栽の小売価格（事例調査） 49
２．小売価格調査対象写真 51
３．「その他の生きている植物（060290）」の輸入動向統計（参考） 58
４．関連機関・輸入企業等リスト 58
５．高松市生産者の盆栽に対する評価 60

第２部　ベルギー 67

１．ベルギーにおける盆栽の普及状況 67

２．盆栽の輸入動向 67

３．輸入・取扱業者 68
（１）Ecole de Bonsais Dong Son(ドン・ソン盆栽教室、ブリュッセル市内盆栽取扱業者).. 68
（２）Bauwens Bonsai（ベルギー大手盆栽取扱い業者） 71

４．EUでの植物検疫状況 75
（１）基礎となる法規 75
（２）関連法規 76
（３）関連部局 83

５．ベルギーにおけるまとめと課題 84

資料編（ベルギー） 85
１．輸入・取扱業者リスト 85
２．盆栽愛好家グループ 86

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

【調査の背景と目的】

過去３年間の盆栽を含む品目（HS コード 060290：その他の生きている植物-その他のもの）の日本からの輸出は伸びてきた。2006 年は 22 億 3,019 万円、07 年は 50 億 4,239 万円、08 年は 51 億円と２年前の 2.5 倍に達した。主たる仕向け国は（08 年）、アジア諸国が 79.6%、西欧諸国が 13.2%でこれら地域で全体の９割超を占めるのが近年の傾向である。輸出の８割近くを占める最近のアジア諸国向けは、香港が１位、２位が中国で庭木を中心としたものが多い。最近では、植物検疫が比較的緩いベトナム経由中国向けのものが中国市場に出回り、迂回輸出などの不透明な事情もみられる。

一方 EU 市場では、日本産モミジ、カエデなどの盆栽・庭木から害虫（ゴマダラカミキリ）が発見されたため、害虫が侵入しない網室などの施設で２年間生育されたもの以外は 2008 年 10 月以降輸入規制強化の対象となった。日本の業者は通常、網室内栽培を行っていない。規制措置発動が丁度盆栽の輸出シーズン（11 月～翌年３月頃まで）直前であったため、特に関東地方で EU 向け直近輸出実績（07 年、７万本）の６割以上に相当する４万数千本が規制対象となった。この影響もあり 08 年秋以降同市場向けの輸出が急速に落ち込んだ。EU では 40 年前から日本の盆栽・庭木などが各国の盆栽愛好家グループの間で親しまれており、同市場向けには、イタリア、ドイツ、ベルギー、オランダ等で根強い需要がある。

アジア太平洋盆栽水石大会（ASPAC, Asia Pacific Bonsai Convention & Exhibition）は 1991 年のインドネシア開催（バリ島）を第１回として２年ごとにアジア諸国で開催され、2009 年 11 月には台湾で第 10 回大会が開催された。大会終了時に次回開催地が決定される慣わしであり、日本からは盆栽の伝統的な生産地を控えた高松市が国内関係者の同意を得て 2011 年の次回開催地に向けた誘致に注力した結果、日本（高松市）での開催が決定された。わが国産盆栽の伝統的、芸術的価値は世界的に認知されており、ASPAC の有力メンバー国はもとより、欧州主要国の盆栽愛好家が日本を訪問した場合、国産盆栽を購入する可能性が強くなり、海外に向けた国産盆栽の大きな発信機会ともなり得る。

国内生産・輸出業者は、現在仕向け地域では太宗となっているアジア諸国において、例えば香港・台湾などでは日本との気候差により中長期的な現地生育が難しく、また日本から輸出禁止のはずの黒松が中国で数多く出回っており不適切な輸出とみられるなどの事情から、日本古来の伝統的盆栽（室内用）を愛好する傾向の強い欧州諸国を対象に海外販路開拓に関心を有している。欧州諸国では、老若男女にかかわらず街ごとに BONSAI 愛好グループが存在し専門誌も購読されている状況から、今後の需要増が期待される。本調査では特に、日本からの上位輸出先国であるイタリアを対象市場として、需要状況を、EU 本部が所在するベルギーを対象として欧州での検疫状況を把握することにより、国内生産・輸出業者の今後の海外販路開拓に資するものとする。

【調査対象品目】

（１）対象品目 HS コード

060290：その他の生きている植物-その他のものに含まれる盆栽（BONSAI）・庭木

（２）対象品目学名

Acer buergerianum（カエデ）、Acer palmatum（モミジ）、 Chamaecyparis obtuse（ヒノキ）、Citrus（柑橘類）、Diospyros（柿木）、Euonymus（ニシキギ）、Juniperus chinensis（真柏、シンパク）、Juniperus rigida（杜松、ネズ）、Lagerstroemia indica（サルスベリ）、Punica（石榴）、 Pinus pentaphylla（五葉松）

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

JETRO

イタリア

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

第１部　イタリア

１．イタリアにおける盆栽の普及状況

（１）沿革

イタリアにおける盆栽の歴史についてのまとまった記録やデータはないが、盆栽に関する最初のイタリア語書籍が出版されたのは 1964 年に村田憲司著の「盆栽入門書」である。また、本格的な日本盆栽がイタリアではじめて一般に公開されたのは、1966 年に北イタリアの港町ジェノヴァで開催された花の国際見本市「EUROFLORA MONDIALE」に五葉松、シンパクなど日本産盆栽 20 点が展示された時とされている。

その後、イタリア国内に盆栽の愛好家が少しずつ増えていき、70 年代後半から日本からの盆栽輸入が始まった。1979 年にはイタリアにおける盆栽普及のパイオニア企業、CRESPI BONSAI がミラノで創業し、盆栽輸入を本格的に始めた。　同時に、1980 年初頭に盆栽愛好会などが誕生しはじめ、80 年代末から 90 年代はじめにかけて各地に多数の愛好会ができるなど、一種の「盆栽ブーム」が生まれることとなった。愛好家や盆栽専門家による盆栽展なども各地で開催されるようになっている。

イタリアにおける盆栽普及・定着の大きな「分岐点」と考えられるのは 1990 年前後といえる。1989 年に日本で開催された盆栽世界大会にイタリアのプロやアマの代表が訪れ、大きなインパクトを得てイタリアに戻った。翌年の 1990 年に、イタリアで第１回ヨーロッパ盆栽大会が開催され、日本盆栽界の巨匠とされる木村正彦氏が特別ゲストとして招聘されデモンストレーションを行い、関係者に強い感銘を与えた。その際、アシスタントとして同行した鈴木英夫氏に対し、イタリアに本格的な盆栽の学校をつくってほしいという要請があり、生まれたのが鈴木英夫氏による「スズキ・スクール」で、その後「SCUOLA D'ARTE BONSAI」という名称の８年制の教育機関に成長した。同氏が 20 年近くイタリアに通い指導したこの学校から、70 名近い卒業生が輩出され、現在イタリア各地で活躍している。

盆栽への関心が高まる中、1995 年には、それまで国内に３つあった盆栽愛好家クラブの団体が合流して、「イタリア盆栽クラブ連盟 UNIONI BONSAI ITALIANI」　が結成された。

90 年代後半には日本からの盆栽を輸入するイタリア企業も増え、過熱する勢いをみせたが、90 年代末をピークに日本からの盆栽輸入ブームは縮小し、2000 年以降は安定期に入っている。

盆栽の愛好家、指導者などは熱心な活動を行っており、1996 年には、盆栽と水石の専門インストラクターの団体である「イタリア盆栽・水石指導者会」（Colleggio Nazionale Istruttori Bonsai E Suiseki）　が創立され、盆栽指導者の資格認定を行い、指導者層の資質向上のための活動を展開している。

（２）盆栽愛好家の種類と特色

イタリアの盆栽市場を理解するためには、盆栽の世界の主役ともいうべき「盆栽愛好家」の特色を把握することが必要であろう。いわゆる『愛好家』を下記のように３つの種類に分類できよう。

＜アマチュア愛好家－『鑑賞型』ではなく『実践型』＞

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

上述した「イタリア盆栽クラブ連盟」の推定では、2009 年現在、イタリアで実際に盆栽を育成している「アマチュア盆栽愛好家」の数は全国で約 7,000 名程度とされている。
「盆栽愛好家」の技術的レベルはまちまちで、文字どおり、趣味レベルの者、地元の盆栽クラブに所属し熱心に活動をするもの、あるいは内外の盆栽コンクールでも優れた実績をあげるレベルのものまで幅がある。共通した特色は、美しく出来上がった盆栽を鑑賞するのではなく、自分で盆栽を育てる、その実践の過程を楽しむ愛好家が大多数を占めていることであろう。

＜盆栽インストラクター・盆栽作家－『盆栽のみで生活している人は少数派』＞
インストラクターあるいは盆栽作家として活動している人は国内で数十名いるとされている。とはいえ、盆栽指導やワークショップの実演指導や大会の審査員、コレクターの盆栽メンテ、あるいは盆栽輸入業者の盆栽手入れなど、盆栽関連の仕事だけで生計をたてている人は少数派で、「本業」（あるいは「副業」）の傍らに盆栽の仕事を進めているものが多い。なお、「イタリア盆栽指導者会」（IBS）から正式にインストラクターの資格認定を受けているのは 2009 年夏現在、全国で 28 名である。

＜盆栽コレクター＞
盆栽を自ら育てるのではなく、美しく完成された高価な盆栽の鑑賞や収集・投資を目的に継続的に盆栽を購入する、純粋の意味での「コレクター」の数はそれほど多くない。イタリア全国でも十名前後といわれるほど少数である。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

２．盆栽の生産・輸入･流通動向

＜調査対象品目＞

表１　調査対象品目（「その他の生きている植物･その他のもの」に含まれる、盆栽（BONSAI）、庭木 ）

学名	日本語	HS コード
Pinus pentaphylla	五葉松	すべて 060290
Juniperus rigida	トショウ	
Juniperus Chinensis	真柏（シンパク）	
Chamecyparis obtusa	ヒノキ	
Acer buergerianum	カエデ	
Acer palmatum	モミジ	
Lagerstoemia indica	サルスベリ	
Punica	石榴（ザクロ）	
Euonymus	ニシキギ	
Diospyros	柿木	
Citrus	柑橘類	

（１）生産

１）盆栽の職業的生産者は存在しない

イタリアには｢盆栽｣を職業的に生産する｢生産者｣は現在のところ、ほとんど存在せず、特に、日本から輸入される上記表１の品目を販売目的に職業的に生産する生産者はいない。

２）欧州土着品種の盆栽生産は一部

一方、地中海・欧州土着品種については、販売を目的とした盆栽生産が一部で行われているが、オリーヴ、イタリア産のカエデ、モミジ、リンゴ、コトネアスター、ピラカンサなど実のきれいなものに限定されている。したがって、日本からの輸入品種とは異なるもので、日本産盆栽と競合するものではない。業界関係者の話では数量的にはイタリア盆栽市場全体の１%程度とされている。なお、ビジネスベースでこれら品種の盆栽を本格的に生産しているのは、ピストイアの Franchi 社（詳細は第５項参照）のみである。

表２　イタリアで生産されている主な地中海・欧州土着品種（順不同）

学名	日本語
Olea europaea	オリーヴの木
Cotoneaster	コトネアスター
Pyracantha	ピラカンサ（バラ科）
Podocarpus　macrophylla	真木（まき）
Malus	リンゴ
Acer	イタリア産カエデ・モミジ

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

（２）輸入

１）「その他の生きている植物（060290）」の日本からの輸入

したがって、イタリアの盆栽市場は実質的には「輸入盆栽」によって成立していることになる。調査対象品目に関して、東アジア諸国からイタリアへの輸入動向を表３、４に示した。

まず、表３にみられるように、2008 年のイタリアにおける「東アジア」からの「その他の生きている植物」の輸入額全体のうち、54.2%が日本からの輸入（約 350 万ユーロ）であり、調査対象品目の輸入市場では、日本が圧倒的なシェアを誇っている。２位は中国で同 33.4%、3 位は台湾で 7.5%である。これら３カ国で全体の 95%以上を占める。その他では第４位としてタイが 2.1%を占める程度である。

なお、日本産盆栽については、日本からイタリアに直接輸入されるものに加えて、欧州の植物物流拠点であるオランダなど EU 域内で輸入されたものがオランダの商社を経てイタリアに入るケースがあり、そのほかスイス企業経由で入ってくるものもある（詳細は不明）。

表３　東アジア諸国からイタリアへの輸入動向（2008 年、品目コード：060290）

	輸入額（ユーロ）	構成比（%）	輸入量（kg）	構成比（%）	平均単価（ユーロ/kg）
日本	3,495,014	54.2	1,544,426	37.5	2.26
中国	2,153,833	33.4	2,164,447	52.6	1.00
台湾	483,000	7.5	279,933	6.8	1.73
タイ	133,492	2.1	68,127	1.7	1.96
シンガポール	90,262	1.4	6,337	0.2	14.24
韓国	45,527	0.7	33,800	0.8	1.35
インドネシア	34,694	0.5	7,438	0.2	4.66
マレーシア	12,819	0.2	9,919	0.2	1.29
その他	0	0	0	0	0
東アジア計	6,448,641	100.0	4,114,427	100.0	1.57

（資料）国家統計局（ISTAT）データから作成

表４　東アジア諸国からイタリアへの輸入額の推移（2004～2008 年、品目コード：060290）

輸入金額　（単位：ユーロ）

	2004 年	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年（暫定値）
日本	2,081,793	1,839,029	1,808,028	2,416,609	3,495,014
中国	1,271,194	1,600,832	1,948,214	2,246,815	2,153,833
台湾	723,303	590,997	555,581	708,197	483,000
タイ	22,412	11,115	74,597	28,497	133,492
シンガポール	68,356	63,133	81,222	78,983	90,262
韓国	27,497	40,611	0	0	45,527
インドネシア	23,096	26,957	33,098	16,479	34,694
マレーシア	3,415	5,163	2,828	2,051	12,819
その他	54,351	24,915	32,534	0	0
東アジア計	4,275,417	4,202,752	4,536,102	5,497,631	6,448,641

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

輸入量　（単位：キログラム）

	2004 年	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年（暫定値）
日本	691,947	682,747	695,116	1,094,132	1,544,426
中国	1,295,141	1,602,006	1,977,465	2,326,681	2,164,447
台湾	768,305	636,963	306,507	359,342	279,933
タイ	1,369	9,350	81,954	22,602	68,127
シンガポール	4,481	3,630	4,140	4,910	6,337
韓国	5,400	8,571	0	0	33,800
インドネシア	20,558	10,694	28,820	4,324	7,438
マレーシア	172	420	230	148	9,919
その他	34,093	38,190	41,978	0	0
東アジア計	2,821,466	2,992,571	3,136,210	3,812,139	4,114,427

（資料）国家統計局（ISTAT）データから作成

＜日本からは「庭木」輸入が８割、「盆栽」は２割＞

なお、調査対象品目（060290）には、「盆栽」に加えて「庭木」も含まれる。両者を区別する統計データはないが、業界関係者の調べでは、日本からの庭木はイタリアの大手輸入業者が大量に輸入しており、同品目の輸入額 350 万ユーロ（2008 年）のうち、約 80%が「庭木」であることから、「盆栽」はせいぜい 20%程度（約 70 万ユーロ）であろうと推定される。また、庭木の輸入が増加傾向にある一方、盆栽輸入は縮小傾向にあるとされている。

＜「庭木」は欧州有数の庭木生産地で輸入し各国へ＞

日本の庭木は、イタリアでは「マクロボンサイ（Macro Bonsai）」あるいは「ボンサイ・ジガンテ（Bonsai Gigante）」（「いずれも大きな盆栽」の意）などと呼ばれ、珍重されて造園業者ルートで流通している。主な品種はイレックス、松、カメリア、さつき、モミジなどである。

イタリア中部トスカーナ州のピストイア地域は、欧州最大の庭木・苗木生産産地として知られ、同地域だけで、日本からイタリアへの庭木輸入の 50%以上を占めているとみられる。特に、庭木生産分野で欧州最大手の Vanucci 社だけで、毎年 70 コンテナ以上の日本の庭木が購入されている。同社では、いったん輸入した庭木を自社の栽培場で２～３年育成した後、販売に出している。ピストイア地域には欧州各国の造園業者や関係者が大型トラックで植木の買い付けに訪れる。例えば、植木を 100 本購入するうち、日本産のものを２～３本入れるという位置づけで取り扱われている。

ピストイア産地の植木の販路は欧州だけでなく、地中海沿岸諸国にも広がっており、日本からイタリアへ輸入される庭木の半分以上は、最終的にはイタリア国外に運ばれるとみられている。

北イタリアにはピストイア以外にも、日本からの庭木の輸入業者がいくつか存在し、盆栽と庭木の両方を輸入している企業もある（第５項参照）。

日本の庭木はその形の美しさ、オリエンタル風のイメージにより欧州での人気は上昇中で、いわゆる「日本庭園」は「日本風コーナー」をつくるためだけではなく、普通の欧風庭園に変化をもたせるためにも利用されている。日本国内の需要低迷により、高品質な庭木が安価で購入できることも、輸入増加の原因となっている。

＜「盆栽」輸入に絞ると、中国からの盆栽が日本の約３倍に＞

一方、中国からの同品目の輸入については、ほぼすべてが「盆栽」とみられている。

したがって、本調査の対象である「盆栽」に限定して日本と中国からの輸入額を比較すると、日本からの輸入額約 70 万ユーロ（推定）に対して、中国からの輸入額はその３倍（215 万ユーロ）相当になるといえる。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

（３）流通

１）イタリアで流通している盆栽の種類

以上で示されるように、現在イタリア市場で流通している盆栽は主として、①日本からの輸入盆栽、②中国など他のアジア諸国からの輸入盆栽ということになる。

なお、イタリアでは一般に、日本からの盆栽は、「屋外盆栽」（BONSAI ESTERNO）、中国からの盆栽は「室内盆栽」（BONSAI INTERNO）と呼ぶ区分けが、普及している。

①日本からの輸入盆栽の主要品種

日本からの輸入盆栽の品種に関する統計データはないが、市場に流通している主要な品種は下記のとおりである。

表５　イタリアで流通している日本産盆栽の主な品種

学名	日本語
Pinus pentaphylla	五葉松
Juniperus rigida	トショウ
Juniperus Chinensis	シンパク
Acer buergerianum	カエデ
Acer palmatum	モミジ
Rhodondem	さつき
Punica	ザクロ
Diospyros	柿木

②中国などアジア諸国からの輸入盆栽の主要品種

一方、中国からの盆栽輸入量は近年拡大している。中国からの輸入盆栽の品種についても統計データはないが、業界関係者の話では、全体の 50%以上が「インドゴムノキ」（Ficus Elastica）　と「ガジュマル」（Ficus Microcarpa）など「フィクス Ficus」が占め、その他は、コトネアスター、ハクチョウゲなどとされる。モミジ・カエデを除くと、日本からの主要輸入品目とのバッティングはほとんどみられない。モミジ・カエデ類は、日本品と同品種のものが市場で販売されているが、サイズは小型盆栽に限定されている。

表６　イタリアで流通している中国その他アジア産盆栽の主な品種

学名	日本語
Ficus microcarpa	ガジュマル,タコウノキ、台湾松
Ficus　Elastica	インドゴムノキ
Cotoneaster	コトネアスター
Cotoneaster Salicifolius	ヤナギバシャリントウ
Podocarpus　macrophylla	真木（まき）
Olmo	ニレの木
Serissa	ハクチョウゲ（白丁花）
Carmona macrophylla	フクレギシダ
Acer buergerianum	モミジ
Acer palmatum	カエデ

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

なお、中国からの小型盆栽は、イタリアの NOP 団体が行う「エイズ撲滅キャンペーン」などの際、国内の主要広場で小口献金者に配布するプレゼントとして大量に使われることでも広く普及した。また、店頭でも小さいものは５～10 ユーロ程度と安価に販売されている。安価であるため、花鉢や観葉植物のように気軽に扱う消費者が多い。

③愛好家やプロ盆栽作家の生産する盆栽

以上は市場で販売されている盆栽であるが、これとは別に、愛好家やプロ盆栽作家などが自分のために育てた盆栽を仲間同士で交換や譲り合うことも行われているが、これらは「市場に流通」しているわけではない。

２）日本からイタリアへの盆栽の輸入・流通経路

①輸入･流通の流れ

一般的な日本からの盆栽輸入の流れとしては、まずイタリアの輸入業者が来日し、日本の輸出商社の案内で盆栽生産者をまわった中から購入する盆栽を選択する。その後のコンテナによる輸出関連業務は日本の輸出商社が担当し、イタリアの港に着いた後は、イタリアの盆栽専門通関業者が通関業務一切を引き受け、輸入業者のもとに輸入物を納品する。

A　日本の盆栽生産者
↓
B　日本の輸出商社
↓
C　イタリアの盆栽専門通関業者　（例.イタリア北西部の場合はジェノバの専門会社（日本からの盆栽輸入の通関業務をほぼ一手に引き受けている））
↓
D　イタリアの盆栽輸入・取扱業者　＝　E 盆栽販売専門店

②現地小売価格設定の仕組み

イタリアの輸入業者および日本側の輸出商社ごとに異なるが、一般的な場合でみると、

・A の段階の生産者出し価格を 100 とすると、
・Ｂ，Ｃ段階においては最低でも合計 60%以上加算され、
・D は 160%～200%の価格で入荷

あるいは、B の輸出商社が FOB 価格を設定し（A と B の取り分は不明）、それに対して C のコミッションが加算されるというケースもある。

いずれにしても、「Dイタリアの盆栽輸入・取扱業者」入荷時のコストに対して、上代（希望小売価格）の設定は２～３倍となる場合が多い。少ないところでも 1.5 倍、多いところでは４倍程度に設定されている。この違いは、各輸入・取扱業者の持つターゲットや流通チャネルの種類そして価格政策などにより生じているといえる。

３）日本産盆栽の輸入･取扱業者

日本の盆栽をコンテナ単位で輸入している企業は、イタリア全国で６～７社程度とみられるが、諸事情で日本からの輸入を停止している企業もあるため、現在、輸入・取扱業者として活動している主要企業は下記の５社である（各社の事業概要など詳細は第５項参照）。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

いずれも、輸入だけではなく、盆栽の小売販売や卸しを行っている。盆栽の扱いには専門知識を持つスタッフや検疫期間の保管施設が必要となるため、輸入だけを行い、国内流通を別の会社に委嘱するという業態、または反対に、自ら輸入せずに盆栽専門店を経営するという事例は見受けられない。言いかえれば、輸入業者が盆栽専門店舗経営者および卸業者を兼ねる場合が多いということになる。

表７　日本産盆栽の主な輸入･取扱業者、盆栽専門店舗

	所在地	会社名
1	ロンバルディア州 ミラノ県	Crespi Bonsai（Crespi Srl.） クレスピ・ボンサイ
2	ロンバルディア州 ミラノ県	OltreilVerde s.r.l. オルトレ・イル・ヴェルデ
3	トスカーナ州 ピストイア県	Franchi Bonsai VIVAI フランキ・ボンサイ・ヴィヴァイ
4	ヴェネト州 トレヴィゾ県	Barbazza Bonsai Srl バルバッツア・ボンサイ
5	ピエモンテ州 トリノ県	Fuji Sato Company s.n.c. フジサト・カンパニー

４）個人による直接購入・イタリアへの持ち込み

なお、日本から正規に輸入した盆栽で特に高額な質の高い盆栽は、イタリア市場では何倍もの売値になるため、盆栽のコレクターや愛好家、盆栽の専門家などが来日し、盆栽生産者から盆栽を直接購入してそのままイタリア国内に持ち込むケースもみられる。

５）イタリア国内の盆栽流通

＜日本の盆栽の場合＞

日本産の盆栽については、主として上記表７の盆栽輸入･流通業者直営店舗で販売されている。

街中の花屋（専門性の高いところ）や郊外型のガーデンセンターなどで常時、日本産盆栽を置いているところは少ない。客のリクエストに応じて、上記の業者から取り寄せ販売をしている、あるいは品揃えの彩りとして少量が置かれている程度である。

各地にある盆栽クラブの会員は、クラブの盆栽指導者などを通して、上記専門店から初心者用盆栽など取り寄せることもある。

一方、中国製盆栽は、輸入業者が郊外型ガーデンセンターや大型ショッピングセンターに直接卸し、安価に販売するほか、花問屋を通して街角の花屋等にも流通されている。中国産盆栽と日本産盆栽の両方を輸入している輸入業者は、数は少ないながら、中国産の販路を通じて日本産も卸しているとみられる。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

３．盆栽の教育機関・資格認定・定期刊行物

（１）盆栽の教育機関

１）盆栽の学校

①SCUOLA D'ARTE BONSAI　（盆栽芸術学校）

日本の盆栽作家　鈴木英夫氏が主任講師として、1991 年から 10 年以上にわたり定期的にイタリアを訪れて指導した本格的な盆栽教育機関。入門コースから中級、上級および指導者級コースと４コースあり、１コースが４セッション、全体で 16 セッションの講習で構成される。毎年春と秋に１セッション（各３日間）が実施され、２年間で１コース修了。各コース修了時には終了試験が行われる。すべてを終了するには８年間を要する。

■インタビュー

盆栽学校の指導者：鈴木英夫氏～「目標はイタリアに盆栽を定着させること」～

1991 年の設立当初は、アマもプロもレベルが低かった。生徒はイタリア全土からやってきた。参加者は男性、女性、年代に関係なく、若い人も高齢者もアットホームな授業だった。年に２回の講習会なので、毎回３日間は朝から夜中まで夢中で取り組んだ。盆栽の樹形、理論と実技の基本を叩き込んだ。毎回、１年分の手入れを教えた。そして各自が自分の盆栽を持ち込む。３年、５年と講習会は続き、結局、８年間で終了という制度となった。

最初から私の目標はイタリアに盆栽を定着させるということで、自生地の地方にあった植木を使い、土地にあった自分の盆栽つくりを指導してきた。シチリアではオリーヴやエリカ、ナポリにはいいブナがある。あるいはローズマリーの木。北の方は松類に事欠かない。サルデーニャはコルクなど。あるいは自生地のジネプロなど。参加者それぞれに個別指導を行った。

具体的な事例をみせて理論を解説するようにつとめた。田園からとった木を盆栽につくっていく方法。盆栽を形づくるには８年では早いほう。モミジの場合「とり木」をして作っていく方法など。指導にあたって重視したのは、初歩・基本を定着させることや、自然に逆らわないようにすること。盆栽は、自然以上に美しいものをつくることにある。基礎を理解した後は、自分の国にあった感性で盆栽を育てていけばいいと考えている。

教えることで逆に学んだこともある。イタリア人は器用な人が多い。手作りのセンスがある。そして感性は非常に優れている。イタリアは、アメリカよりフランスやドイツよりはるかに後に盆栽をはじめたが、進歩が早かった。日本にも大勢勉強にきている。イタリアのアマチュア愛好家は日本のアマチュアよりもはるかにレベルが高く熱心なように思える。

②UNIVERSITA' DEL　BONSAI　盆栽大学

クレスピ・ボンサイの主催する学校。1991 年創立。同社の盆栽講習ホールにて実施。

第１～第３レベルまで３コースが実施されている。

各コースとも、年間１月、３月、５月、10 月に実施される４セッション（各セッションは土曜・日曜の二日間で 12 時間）により構成されており、計 48 時間。各回、その季節に行う作業が指導される。全コースを修了するには３年間かかる。定員は各コースとも 18 名。

日本人講師１名とイタリア人講師２名が実技と理論の指導を行っている。

別途、「短期コース」として同社本部およびミラノや隣県のブレーシャにある直営店舗でも年間 14 日間、毎回３時間程度のコースも開講している。

その他、各地の盆栽クラブや盆栽インストラクターなどにより、個別の研修スクールやワークシ

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

ョップが多数実施されている。

２）日本の専門家との盛んな交流

日本から、木村正彦氏や小林國男氏をはじめとする有名盆栽作家を招いてのデモンストレーションやワークショップも､頻繁に行われている｡現在プロとして活躍している者の中には日本を訪れ、有名作家のもとに長期・短期に「弟子入り」をして本格修行をして教えを受けた経験者も少なくない。

（２）盆栽インストラクター

１）イタリア盆栽・水石指導者会　（IBS ）　Colleggio Nazionale Istruttori Bonsai e Suiseki

盆栽および水石の指導者･教育者の団体で 1996 年に創立された。盆栽インストラクター資格の認定を行うとともに、盆栽インストラクターの資質向上のための活動を展開している。現在、ISB の認定資格を持つ会員は 28 名。

２）盆栽指導者（インストラクター）　資格認定制度

概要は以下のとおり（５名の審査員により審査される)。

＜資格認定受験の申請条件＞

①｢未加工の素材」から育成した少なくとも 15 の盆栽の資料（写真やデータ類）を提出すること。種、庭木や自然界の植木から盆栽に仕上げるには少なくとも７～８年の年月がかかるため、その条件を満たすことは容易ではない。

②上記作品のうち最低３～４個は、国内・海外のコンクールなどで入賞していること。

③IBS の会員からの推薦を得ること。

＜試験の内容＞

①実技試験

審査委員の見ている前で、持ち時間３時間で未加工素材を用いて最初の骨格作りデモンストレーションをする。その際には形の良い盆栽をつくる実技能力だけでなく、言葉での説明能力が重視される。インストラクターとなるためには、盆栽作家として優秀であるだけでなく、説明・解説できる能力を持つ指導者としての資質が問われる。

②理論試験

審査員の前での質疑応答。盆栽の美学、生理学、植物病理学など。

2009 年の審査では、３名が合格している。

（３）盆栽の主要刊行物

イタリアでは盆栽に関するイタリア語の書籍が多数発行されており、定期刊行物としては下記のものがある。

１）「BONSAI　盆栽＆NEWS」

発行：Crespi　Editori
配布方法：市販（A４版カラー70～80 ページ、隔月発行）
創刊：1990 年
価格：6.0 ユーロ、年間購読料 32.50 ユーロ
主な記事：およそ８割が日本の国風展の紹介記事や木村正彦氏ほか日本人盆栽作家による盆栽解

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

説など「雑誌　盆栽世界」（株式会社新企画発行）のイタリア語翻訳記事。残り２割程度が、イタリア人執筆者によるイタリア土着品種の盆栽に関する記事、イタリアでの盆栽や植物・庭園関連の新刊紹介、各地の盆栽関連のニュースなど。

２）「UBI　Bonsai.it」

発行：イタリア盆栽クラブ連盟 UBI (Unioni Bonsai Italiani)

配布方法：UBI 会員に機関紙として送付

（A４版カラー56 ページ程度、年４回発行）

発行部数：1,800 部

主な記事：「SPECIALE　KINBON」として日本の近代出版発行の『近代盆栽』（KINBON）の特約記事が、イタリア語で転載され日本の木村正彦氏など有名作家の最新の作品が紹介されている。一つの盆栽について原素材から完成作品にいたる過程の詳細な記録、盆栽の技術、各地の盆栽愛好会の活動紹介、告知記事など。

さらに、UBI 会員には別途『近代盆栽』（KINBON）日本語オリジナル誌が特別価格で頒布されている。

その他、オランダの出版社発行でイタリア語を含む ５カ国語版を発行している「Bonsai Focus」、Bonsai Arte Natura が会員向けに送付している「BONSAI ARTE NATURA」がある。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

４． 盆栽愛好家クラブ

（１）愛好家クラブの概要

現在、盆栽愛好家クラブは全国におよそ 200 あるとされている。地域別には北イタリアに集中しているが、中部や南部にも愛好家クラブは存在している。

平均的な会員数は 20 から 30 名程度。クラブの活動は毎月２、３回程度、各自が盆栽を持って定期的に集まり、盆栽の育て方についての意見交換、専門家による技術指導などが行われている。通常の場合、クラブごとに盆栽指導者がおり、会員に技術的な指導を行っている。愛好家クラブの会長が指導者を兼ねる場合も多いが、専門指導者に委嘱している場合もある。

ほとんどのクラブで年に１、２回、会員作品の展示会や優秀作品の表彰などを行っている。年間を通し各地で、熱心な愛好家クラブは「盆栽フェスティバル」などを開催しており、盆栽のプロや日本の人気作家を招き、全国の盆栽愛好家の作品を集めてコンペを行うなど大掛かりな催しが多数開催されている。

（２）イタリア盆栽クラブ連盟（UBI：UNIONI BONSAI ITALIANI）の活動

盆栽愛好クラブの全国組織。1995 年に、それまで３つあった団体が合流して本組織が発足した。2009 年９月現在、約 86 団体が加盟している。会員の資質向上のための啓蒙活動、情報交流、全国大会（優秀作品表彰）開催、定期刊行物出版など多岐にわたる活動を行っている。

なかでも､毎年１回開催される全国大会では､全国の愛好家やプロの出展による展示会が開かれ、３作品に「UBI 大賞」が、12 作品に「UBI 賞」が与えられる。さらに、展示作品の中から最優秀作品約 50 点が、同連盟が毎年発行する年鑑「最優秀作品集　盆栽と水石（Migliori Bonsai e Suiseki)」に大きな写真入りで紹介され、盆栽界で認められるための「登竜門」として重要な役割を担っている。

優秀な若手愛好家の発掘および育成にも積極的であり 「GIOVANE TALENTO（若きタレント)」の表彰も開催している。

表８　UBI 加盟の愛好家クラブ数（州別）

州	加盟愛好家クラブ数
ピエモンテ州	6
ヴァッレ・ダオスタ州	1
ロンバルディア州	16
トレンティーノ・アルト・アディジェ州	1
ヴェネト州	4
フリウリ・ヴェネツィア・ジュリア州	2
リグーリア州	2
エミリア・ロマーニャ州	13
トスカーナ州	6
ウンブリア州	1
マルケ州	9
ラツィオ州	4
アブルッツォ州	1
カンパーニア州	4
プーリア州	6

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

カラブリア州	2
シチリア州	6
サルデーニャ州	1
サン・マリーノ共和国	1
計	86

注：モリーゼ、バジリカータ州はなし。
（出所）UBI 機関紙「UBI　Bonsai.it」2009 年 9 月号

その他、州内または複数の州にわたる愛好者クラブ間のネットワークも存在する。展覧会の共同開催をしたり、小規模のクラブではインストラクターの派遣を依頼するなど、広く自由に交流している。

表 9　地域別　盆栽クラブ・ネットワーク

ネットワーク名	地域
ピエモンテ・ロンバルディア Piemonte Lombrdia Coordinamento	ピエモンテ州、ロンバルディア州
エミリア・ロマーニャ Emilia Romagna Coordinamento	エミリア・ロマーニャ州
トリヴェネト Triveneto Cooridinamento	ヴェネト州、フリウリジュリア・ヴェネツィア州

イタリアの州別地図（参考）

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

（３）地域の盆栽愛好会の活動　ケース事例

１）エミリア盆栽協会　Associazione Emilia Bonsai

所在地：エミリア・ロマーニャ州フェッラーラ市

本部：フェッラーラ大学植物園内

フェッラーラは、ルネサンス揺籃の地として歴史と伝統を誇る都市で 1995 年にユネスコ世界遺産として指定されている。この町の中心部にあるフェッラーラ大学植物園の中に本部を持つエミリア盆栽協会本部を訪れ同クラブ中心メンバーの二人に活動内容や盆栽に対する考えなどを伺った。

○沿革

エミリア盆栽協会は数名の仲間により 1982 年に創立された。同協会はエミリア・ロマーニャで最初の愛好会であるだけでなく、イタリア全体でも最も古い５つのクラブの一つである。活動領域はフェッラーラであるが、当時エミリア地方には盆栽に関しては何もなかったので「エミリア盆栽協会」という名前をつけ、盆栽展開催などの活動をはじめた。その後、ブームになって 80 年代末から 90 年代はじめには多くのクラブができた。

この 30 年以上の間には、上げ下げの波があった。90 年代当初には会員数は 100 名に達し、80 年代、90 年代には全国レベルの展覧会を開催したり、イタリアを代表する盆栽作家やプロフェッショナルなインストラクターなどを招聘した。しかし、90 年代末から 2000 年代初頭には会員は 30 人程度に減ってしまった。現在は少し関心が戻ってきており 30 名から 50 名程度だが、入る人もいれば辞める人もいる。初心者コースに参加してどのようなものかわかるとそれでこなくなる人もいる。

一方で、AIDS 撲滅キャンペーンで配布された小さな盆栽と出会ったことで興味がわき、こちらにきて参加し、クラブに残って活動を続ける人もいる。

○活動

定期集会は毎週金曜日 21 時から２、３時間程度。ほぼ会員全員が自分の盆栽を持ってくる。鉢換えをする必要があったり、接ぎ木が必要だとか、ここをこう変えたほうがいいとか、針金のかけかたを教えてもらったり、各自の自分の盆栽に対して一緒に作業をしたり意見交換をしたり、指導を受けたりする。

通常は、会員の中の主要メンバーが指導するが、年に２、３回程度、盆栽インストラクターのプロを招いて高いレベルの特別デモをしてもらう。通常の初心者コースは主要メンバーが指導をする。

○会員

男性が中心だが女性も数名いる。20 歳の若者もいれば、30 代から 70 歳代の人まで年齢の幅は広い。高齢者は時間が沢山あるので集まる率も高い。若い人も大学に通いながら毎週ではなくても参加する人もいる。条件は異なるが、情熱は同じ。**「盆栽は情熱」「情熱がなければ盆栽はできない」**がモットー。

盆栽の手入れがあり、盆栽はほっておくことができないので夏バカンスにはいかない人も少なくない。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

会員はみなアマチュア愛好家で各自が自慢の盆栽を持っているが、80 鉢、100 鉢も持っている人もいる。平均では 20～25 鉢程度ではないか。自宅のスペースや庭の問題などもあり、庭がない場合は、バルコニーに置くので、大きなものはあまり持てない。

○盆栽をはじめたきっかけ

アンジェロ・モンタレッティ Angelo Montaletti さん（前頁写真左）

「20 年くらい前のこと。小さな鉢をクリスマスの時にもらった。それからその鉢を育てたいと思って、本を読んだりして、このクラブがあることがわかってここにきた」

ファウスト・モリネーリ Fausto Molineri さん（前頁写真右）

「ここの植物園で働いている。もともと植物が好き。たまたまこのクラブを創立したメンバー何名かと知り合って、創立間もない時期に会員になって現在にいたっている。集会用に大学がこの植物園内のスペースを提供してくれた。この拠点を無料で使わせてもらえてありがたい。」

○最近の動向

ここにきて、盆栽への興味が戻ってきているようにみえる。会員も増えて、初心者用コースは大勢の人が参加する。それがいつまで続くかは未定だが。室内用盆栽（中国からの輸入盆栽）は、安価なので気軽に買う人が多いが、室内用とはいっても枯れてしまって失望してしまう人もいる。それで難しいものとして遠ざかってしまう人もいる。　エミリア・ロマーニャ州盆栽クラブ・ネットワークの合同展では、いくつかのクラブが消滅してしまったが、最近、新しいクラブが増えてきた。ブームは 80 年代末から 90 年代初頭で、その後下降したがこの２、３年は少し回復してきた。輸入業者も一時増えた後、大きく減ったが、最近少し戻ってきた。日本の盆栽を扱っているところは、今はほんの数社しかない。

○日本の盆栽への評価（各品種の好き嫌い）

学名	日本語	評価	コメント
Pinus pentaphylla	五葉松	◎	大変美しいし、根っこが素晴らしい。しかし、エミリア地方は夏が暑いため、栽培はあまりむいていない。少数の鉢であれば暑い時期に涼しい場所にもっていけるが。残念ながらこの地域ではあまり持てない。
Juniperus rigida	トショウ	◎	これは良い。この地域は暑いので気候的にはむいている。この地域は夏は大変高温になり、湿度も高く霧も多い。土着のジェネプロもあり、

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

			それと似ているのでよく育つ。
Juniperus Chinensis	シンパク	◎	気候の問題はない。これは栽培が難しいのではなくて、シャリとかジンとか、針金の入れ方とか、形成していくのに技術が必要。
Chamecyparis obtusa	ヒノキ	X	好きではない。嫌い。美的に好まない。葉が平面的で美しくない。
Acer buergerianum	カエデ	◎	きれいなので好き。種から育てたこともある。普通の苗木から育てることもある。早急に成長するのでいい。われわれの会員は山採りをする場合が多い。
Acer palmatum	モミジ	◎	好き。AIDS 撲滅キャンペーンでもらった小さな盆栽を大切に育てた会員もいる。
Lagerstoemia indica	サルスベリ	△	好きだが持ってはいない。
Punica	ザクロ	○	好き。庭園などでいらなくなった古い幹を使って盆栽にして育てる。フジとかザクロは庭にも田園にもどこにでもあるのでそこからもってくる。
Euonymus	ニシキギ	X	気候にもあわないし、美的にも興味がない。病気になりやすい。
Diospyros	柿木	△	
Citrus	柑橘類	X	これはまったく論外。冬は寒いので暖かくする必要がある。栽培は難しくやりがいもない。寒いと室内に持ってくる必要があるが、葉っぱが室内に沢山落ちるだけ。
Rhododendron lateritium	さつき	○	好む人が多い。ただし、さつきには酸性・中性の水が必要だが、ここの水は硬水であわない。庭木としてはまったく難しい。盆栽の場合も水道の水が使えないので難しい。

○日本からの輸入盆栽の購入

この地域で日本の盆栽を買おうとすると、Barbazza（トレヴィゾ）に行く。あるいは、やや遠いがミラノの Crespi か Oltre il Verde あるいはトスカーナの Franchi に行く程度。

Barbazza に行く人が多いというのは、これから盆栽をつくるための素材として使うものを購入することができるからだ。同店では鉢なしの盆栽も集めている。良い根っこがついているもの、これから育ててれば良い盆栽になるものを売ってくれるので買いに行く。賢い売り方だと思う。立派な鉢に入れてある必要はまったくない。鉢は自分で選べばいい。盆栽を作る作業や仕事が好きだから育てているので、少しずつ、完成させて自分たちの技術を磨いていく。育てることが好きなのだ。自分たちは完成された傑作を購入するコレクターではない。会員の中にはやや高いものを購入する人もいるが、完成品として高いのではなく、マテリアルとして潜在力のあるものを買う。

○素材の調達方法

いずれにしても日本からの盆栽は高価なので、主流としては、普通の苗木店にいって苗木を購入して、そこから盆栽をつくることの方が普及している。とくに、モミジについては普通の苗木から探す。ザクロであればその辺でとってきて盆栽にすることができる。

欧州土着品種のニレ、リンゴやオリーヴの盆栽も栽培できる。黒松も種から育てることができる。カシは土着で美しい品種もある。シンパクによく似た土着のシルヴェストロ松もある。これは自然

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

の中にあり、沢山育っているので気候の問題がない。

２）ラヴェンナ盆栽愛好会　Bizantina Bonsai Ravenna

所在地：エミリア・ロマーニャ州ラヴェンナ市

古都ラヴェンナは、紀元５世紀には壮大な西ローマ帝国の首都になり、ユネスコの世界遺産に登録されている貴重なモザイク芸術の宝庫で知られる。この美しい町ラヴェンナに拠点を持つラヴェンナ盆栽愛好会「ビザンティーナ・ラヴェンナ」。ラヴェンナ郊外にある会員の庭を訪ねて自慢の盆栽を見せていただいた後、会長のブルーノ・パヴァネッリ Bruno Pavanelli 氏宅で会員の方々の話を伺った。パヴァネッリ氏の裏庭には、日本産の五葉松、シンパク、そして真っ赤に紅葉したモミジの盆栽をはじめ、ローズマリーやカシ、ブドウなどイタリア土着品種の盆栽、種から育てた黒松やイタリアのジェネプロなどもあわせて 50～60 点の見事な盆栽が飾られている。

○沿革

1992 年に盆栽愛好家の有志が結成したクラブで、現在会員数は約 45 名。イタリア中でもこの会員数を維持しているのはベスト 5 に入る。

○活動内容

＜定期集会＞

毎月第１・第３木曜の 20：30～22：30 に。時期によっては毎週集まることもある。

集会所はラヴェンナ市の公営の多目的スペースを安い料金で借りている。

毎回の集会にはテーマが設けられ、同時に、各人が盆栽を持参し、育て方や手入れなどを自由に相談したり助言しあったりする。

定期集会には、数年前に講習会に参加し、一通りはわかっているが盆栽の相談に来る人もいる。会員ではないが時々顔を出す人もいる。

下記は 2009 年１月から６月までの活動プログラム表である。７、８月は休みで、９月からはまた豊富なプログラムが再開される。

＜2009 年上半期（１～６月）の活動プログラム＞

日程	活動内容
1 月 15 日	顔合わせ、カラマツの扱い方
1 月 22 日	初心者コースの紹介
1 月 29 日	ジュネプロの扱い方
2 月 5 日	タッソの扱い方
2 月 12 日	未定
2 月 19 日	サツキの構造作り

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

2 月 26 日	インストラクターとともに各自の盆栽の評価
3 月 5 日	講習生の最初のテスト
3 月 12 日	寄せ植えの鉢代え
3 月 19 日	講習生の第２テスト
3 月 26 日	未定
4 月 2 日	インストラクターとともに各自の盆栽の評価
4 月 3 日	会員夕食会
4 月 9 日	盆栽作品展の準備、展示する盆栽の最終仕上げ
4 月 18 ～19 日	春の盆栽作品展
4 月 16 日	松の手入れ、石付きの設定
5 月 7 日	さつきの剪定
5 月 21 日	モミジ・カエデ類、オーク類の葉刈り
6 月 4 日	「接き木」と「取り木」
6 月 18 日	さつきの剪定、夏休み前の最後の仕事の後、皆でジェラート

＜初心者用入門コースの実施＞

主要メンバーで盆栽の初心者コースを開講する。理論、実技など全 10 回のコースで育て方や手入れの基本を教える。講習生には小さな二つの盆栽を与えてそれを使って作業をしてもらう。

同コースでは同会でコンパクトに編集した 30 ページほどの小冊子をテキストとして使っている。
“I BONSAI Coltivare bonsai：arte e scienza per capire e accettare i ritmi della natura”
（盆栽　盆栽を育てる—自然のリズムを理解し受け入れるための芸術と科学）

コースには通常、10～12 名ほどの参加者がある。コース終了後、盆栽に「火がついて」会員として残るのは毎回１人か２人程度。

＜会員の盆栽展示会＞

毎年、春と秋の２回、土・日曜の２日間、会員の盆栽発表会を行う。2009 年秋の部は 10 月３～４日に開催したばかりである。会員が自分の盆栽を持ってくる。全部で 60 鉢ほどを展示。市中心部にある図書館を使い、市の後援を受け、地元銀行のスポンサーがついて開催した。

多くの市民が見学に訪れ、盆栽に触れる機会をつくっている。またこの展示会をみて、盆栽に興味を持ち、会員となるもの、初心者コースに通うようになるものもいる。

○会員プロフィール

平均 50 歳程度。高齢者もいる。初心者コースには 25 歳、30 歳の人も来るが、若い層は仕事も家庭もありクラブへの参加も楽ではない。会員の中には 40～50 鉢の盆栽を持っている人もいるが、３～４鉢程度のものもいる。インストラクターを目指し、SCUOLA D’ARTE BONSAI に本格的に通っている会員もいる。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

○盆栽をはじめたきっかけ

会長のブルーノ・パヴァネッリ Bruno Pavanelli さん（前頁写真左）

「1984 年から一人で盆栽を始めた。雑誌で見て興味を持った。小さな展覧会や盆栽展示即売会などで小さな盆栽を買ってはじめた。オルミ、カエデ、ザコベなど。92 年までは一人で独学し、試行錯誤した。創立時からのメンバーの一人である」

ジャンニ・サンティシ Gianni Santisi さん

「私が好きなことを知っていて、妻が一つプレゼントしてくれた。もともとは銀行に勤めていて、盆栽を趣味でやっていた。盆栽の価格が高くて購入が難しいので、10 年ほど前、銀行を早期退職して、盆栽卸業の仕事に飛び込んだ。今は、ラヴェンナ市郊外のガーデンセンターで盆栽コーナーを担当している。絵も書き、画家もしている」

ルチアーノ・ブロンチーニ Luciano Broncini さん（前頁写真右）

「もともと職業は市の公園緑地管理の仕事をしていて植物が好き。自然とこのクラブに入り活動をしている」

ジョルジョ・ジュリアニーニ Giorgio　Giulianini　さん

「外資系企業の代表という要職にいたが、定年を契機に前から関心のあった盆栽をはじめたくて、1 年前にこのクラブに入った。まだ初心者である」

○日本の盆栽の求め方

購入する場合は、これから大切に育てる素材として、20、50、80 ユーロ程度の小さな日本製盆栽を購入する。400～500 ユーロレベルの盆栽を買うのは、会員の中でも４、５名程度にすぎない。

日本の五葉松の 500 ユーロのものを購入し、それを大事に育てた。枝が沢山あって、そこから手入れをする、そういう育てるための盆栽を買う。完成された盆栽を買う気持ちはない。

400～500 ユーロまでならば素性が良くて潜在力があるものであれば 1 年に 1 つくらい買う気持ちになる。1,000 ユーロ出せばもっと良いのがあるが、それは普通の人は買えない。

会員 30 名ほどで一緒に Barbazza に行き、共同購入の形で割引してもらい購入したことがある。盆栽だけでなく、鉢や盆栽道具などの用品も含めて、30 名で 5,000 ユーロ程度購入した（一人平均 150 ユーロ程度の出費となった）。

○その他

イタリアの土着品種については、普通の苗木を、苗木センターなどで購入して盆栽として育てる、あるいは近くの山や田園などでの山採りで調達する。種から育てる場合もある。その他、接ぎ木あるいは取り木など。

○日本の盆栽への評価

日本の盆栽についての評価はとても高い。ただし、価格も高いので、容易に購入できるわけではない。

中国製の盆栽については、価格は安価だが品種も違うし、まったく関心はない。

下記の品種に対しての評価（好き嫌い）

学名	日本語	評価	コメント
Pinus pentaphylla	五葉松	◎	誰もが少なくとも 1 つは持っている。
Juniperus rigida	トショウ	○	この地域は温暖なので栽培は問題ない。
Juniperus Chinensis	シンパク	◎	誰もが少なくとも 1 つは持っている。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

Chamecyparis obtusa	ヒノキ	―	栽培が難しいので好まれない。向いていない。
Acer buergerianum	カエデ	◎	イタリア産の苗木を使って盆栽にすることも多い。
Acer palmatum	モミジ	◎	イタリア産の苗木を使って盆栽にすることも多い。
Lagerstoemia indica	サルスベリ	△	
Punica	ザクロ	△	ザクロの木は近くに沢山あるのでそれを使って盆栽に育てることもある。
Euonymus	ニシキギ	X	関心がない。
Diospyros	柿木	△	実がならないと人気がない。カキも種から育てている人もいる。日本のカキの輸入はほんの少しだけ。
Citrus	柑橘類	X	栽培が難しいこと、またイタリアには他にオレンジやマンダリノなど柑橘類が多種あることもあり普及していない。
Rhododendron lateritium	さつき	◎	美しいので好まれている。ただし、この地域は水道水が硬水のため、雨水をためて使うなど水の調達には手間がかかる。

３）フェルトレ盆栽クラブ　Bonsai Club Feltre

所在地：ヴェネト州ベッルーノ県フェルトレ市

イタリア北東部に広がる山岳地帯のドロミテは、その自然の美しさや地質学的に重要なことが認められ、2009 年 6 月にユネスコの世界遺産に認定されている。フェルトレ市は、このドロミテ山麓にある人口 2 万人程度の小都市。この町のフェルトレ盆栽クラブで、10 月初旬に開催された同クラブの盆栽展を訪れ、展覧会を見学するとともに、会員の意見を伺った。

○沿革

1990 年 9 月に、独学で盆栽を学んだ愛好家 10 名ほどによって結成された。いずれも、盆栽芸術を深めたい、習得して情報を交換したいという共通目的をもった創立者メンバーである。現在の会員数は約 30 名前後となっている。

○活動

毎週木曜 21：00 から 2 、 3 時間程度会員が集まる。
初心者用コースも実施している。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

○会員盆栽展

毎年２回開催。今秋（2009 年秋）は 10 月 4 日（日曜）、フェトレ市内中心部のマッジョーレ広場にあるチンゴラーニ・パラッゼッティ館で開催された。

フェルトレの盆栽クラブ会員だけでなく、ヴェネト州内外の近隣の盆栽クラブからも友情出展があり、合計 70 点ほどの作品が歴史的な建築物の中に調和よく展示され、多数の市民が見学に訪れた。

○日本の盆栽への評価・感想

ドロミテ山脈の山麓にあるこの地域は冬寒く、零下 12 度になる一方、夏は 40 度まで上がるため、盆栽を育てるには気候の問題があって難しい。冬は多少の間、寒さを避けるために温室に入れる必要が生じる。

下記の品種に対しての評価（好き嫌い）

学名	日本語	評価	コメント
Pinus pentaphylla	五葉松	◎	大変よい。誰もが好んでいる。
Juniperus rigida	トショウ	X	この地は冬の温度が低いので不可能。また菌類が生えるのも問題。
Juniperus Chinensis	シンパク	◎	気候の問題はない。これは栽培が難しいのではなくて、シャリとかジンとか、針金の入れ方とか、形成していくのに技術が必要。
Chamecyparis obtusa	ヒノキ	X	好まれない。
Acer	カエデ	◎	これは良い。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

buergerianum			
Acer palmatum	モミジ	◎	これは良い。
Lagerstoemia indica	サルスベリ	X	好まれない。
Punica	ザクロ	△	
Euonymus	ニシキギ	X	好まれない。
Diospyros	柿木	△	それなりに良いものだが、盆栽で良いものは少ない。
Citrus	柑橘類	X	これはまったく論外。

○日本の盆栽について

愛好家は日本の盆栽は『素材』として買って、これを切って、「ジン」や「シャリ」 をつくるなど、パーソナライズするために買う。素材としての盆栽は市場がある。マテリアルとして盆栽愛好家が使える盆栽であれば市場は広がるはず。

ただし、イタリアには「シンパク」に対してはジェネプロ・サビーナ、五葉松に対してはシルヴェストロ松と似たような土着品種がある。　愛好家や盆栽作家は苗木センターで買ったり山採りで調達する。

会員のルーディさん

「５年前にスタートした。もともと植物は好きだったが本をみて盆栽を好きになった。展覧会に行ってそこでクラブ主要メンバーを知って、気に入ったのでクラブに入った。盆栽は購入したものもあるが、松類とカラマツは近くの山で山採りをした。毎日面倒を見る。毎週、クラブの集会にいって一緒に作業をしたりしていろいろ学ぶ。職業は大工なので、木を切るのは得意である。現在 30 歳。　友人たちは「とても美しい」といってくれるが、実際に盆栽をしようというのは誰もいない。今後も続けるつもり。松、カラマツなど大きな幹のあるものが好きだ。日本の盆栽は一つだけ、ニレの木をもっている。」

会員のマッシモさん

「この会には参加するが、本業が新聞・雑誌スタンドの経営なので、毎日 10 時間働き、日曜も開業するのであまり時間がない。前からクラブの存在は知っており、94 年から会員になった。　これ（出展作品を指して）は 94 年から育てている。先輩と山採りのため近くの平原に行き、川のそばで２メートルのものを採ってきた。それを思い切って上の方を切って、だんだんと盆栽に仕上げていった。もう 15 年になる。後はジュネプロ、カエデ、さつきなど。日本の盆栽は持っていない」

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

５． 輸入・取扱業者

主要輸入業者の経営者に沿革、日本からの盆栽輸入状況、価格帯、日本の盆栽への評価などを伺った。

（１）クレスピ・ボンサイ　Crespi　Bonsai

所在地：ロンバルディア州ミラノ県

ルーカ・クレスピ氏
Luca　Crespi

１）沿革

1979 年に私の父、ルイジ・クレスピが創立した。もともとは、私の父が盆栽の愛好家で情熱を持ち、そこから仕事に発展してきた。それ以来、イタリアにおける盆栽専門企業のパイオニアとして、盆栽文化をイタリア社会に広める推進役の役割を果たしてきたと自負している。

弊社は日本から盆栽を輸入した最初のイタリア企業であり、1980 年に輸入を開始して以降、継続的に続いている。当初は、美しく立派な盆栽の傑作を大宮の盆栽作家などから輸入し始めた。日本の文化について深い知識はなかったが、ともかく盆栽が好きではじめた。中国からの盆栽輸入は 86 年に始めた。

90 年代初めには、日本から盆栽作家を招き、プロモーションも行った。1991 年には、ルイジ・クレスピの 30 年間にわたる情熱の結晶として、「クレスピ・ボンサイ・ミュージアム」も創設。同年には、盆栽大学（Universita' Bonsai）も開講した。全コース修了まで３年間かかる。

1990 年には、盆栽書籍発行のために出版部門をつくり、多数の盆栽書籍やマニュアルを発行している。同年には雑誌「Bonsai & New s」を創刊し、この秋（2009 年秋）、創刊 20 年をむかえた。同誌は、年間購読だけでなく街角の雑誌スタンドでも市販されている唯一の盆栽専門誌である。

当社では、日本庭園の設計・施工にも力をいれており、日本から庭園専門家を招いてイタリアに紹介した。現在は本社のほかに、ミラノ市内およびブレーシャにも直営店舗を持っている。

２）ビジネス領域と取扱状況、年間売上高

・盆栽輸入・販売輸入額の割合；日本 70%、中国 30%、ほかにスペインからリンゴ、オリーブ、コトネアスター、メノグラーノなど地中海品種の花や果実ものを少量輸入。
・庭木輸入・販売（日本から）
・盆栽鉢・盆栽用具・備品輸入（日本と中国から）
・日本庭園設計・施工
・直営店舗運営
・雑誌・書籍出版

・年間売上高は 500 万ユーロ（うち盆栽関連は 200 万ユーロ程度）

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

３）日本品の輸入状況

①方法

毎年日本に買い付けに行く。今年は 10 月下旬の 10 日間で盆栽と庭木を選んできた。輸出商社が盆栽生産所に案内してくれてそこで買い付けをする。

②品種

五葉松中心で、シンパク、モミジ・カエデ類など。また、さつきがとても重要。さつきについては生産協会やクラブなども整備されており、きちんと生産されているので購入しやすい。

一方、ザクロやカキなどは買いたくても 15 本、20 本程度しかオファーがない。生産者がつくっていないのか、本当にないのか、たまたまそこに置いていないのかよくわからない。

今年は、モミジ、カエデ類が害虫問題を受けたせいで特にオファーが少なく、思っているものが入手できなかった。

なお､地球温暖化の影響で松も難しくなってきている｡トショウはこのあたりの気候にあわない。

③購入量

盆栽は毎年、平均して 800 鉢程度。盆栽と庭木両方で毎年 25 コンテナ程度。盆栽はそのうち 1 コンテナ程度（盆栽 55%、庭木 45%）。

４） 輸入品価格構成

生産者価格を 100 とすると、輸入・取扱業者は、船賃、イタリア側通関経費などに 30%程度を要し 135 程度で入荷する。小売店には２倍の 270 で卸す（小売店のマージンは 50%）。従って、上代（希望小売価格）は４倍、すなわち 540 となる。

５）ターゲットと取扱品種の価格帯

ターゲットは愛好家やコレクターなど。価格帯は、500 ユーロ以上のものは売れにくい。
ただし、安価で小さい盆栽自体を見つけることが難しい。150 ユーロなどの価格帯品はみつからない。大きくて立派な盆栽は、沢山あるが、イタリアでは売れない。

６）流通・販売ルート

本店、ミラノ市内の店舗およびブレーシャ店舗の直営店で個人客に直接販売。
全国 1,000 以上の小売店へ定期的に卸しているが、大半は中国産の盆栽。日本盆栽は、小売店への毎回の出荷で１点から数点が入る程度。

７）日本の盆栽市場について

当初は日本では、どこにでも自由に行けたが、近年は検疫の問題で、輸出用盆栽に特化している生産所にしか行けなくなった。２年の間にその規則に沿って育てたものしか扱えなくなり選択の幅が非常に狭くなった。買いたくてもオファーが少なく困っている。検疫などの日本のコントロール

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

は甘いのではないか。すくなくとも中国のほうがしっかりしている。

生産者との間に双方的な対話が存在しないのが残念だ。日本の盆栽業界が輸出に対して真面目に取り組んでいるようには思えない。生産者は海外市場でどのようなものが望まれているのか、どのような種類、サイズ、タイプがいいのか知らないし知ろうともしない。トレーディングも市場情報をあまり持たず、生産者にも与えない。対話やコミュニケーションがなく情報が不足している。個々の生産者が孤立していて互いの情報交換もなく自分の経験だけを頼りにそれぞれの道をいっているようで受身な感じがする。こちらとしてはあるものをただ見せるだけ。30 年間、日本の生産者でイタリアの弊社を訪れてきたところは 1 社もない。こちらとしては、出されるものを買うか買わないかの二者選択だけ。特に盆栽のサイズが間違っていて見当違いの場合も多い。

輸入・取扱業者として日本から買おうとすると、実質上は商社を通じて購入しなければならず、輸入業者との取引での割引率に比べ個人取引での割引率の高さや諸コストがかかることなどにより、たとえわれわれが 1,000 個を輸入しても他の業種とちがって規模の論理が機能しない。

この 30 年の間にいろいろ変化があったが、実質的には日本の盆栽市場の発展はなく需要が低迷し大きな困難に出会ったようだ。若い人もいない。何のために盆栽を維持しているのかわからない生産家も少なくない。

いつも残念に思うのは、日本では盆栽の価値を評価していないようだ。日本人は大切に思っていない。日本政府も行政も盆栽を重視していない。しかし、西洋人にとっては、特に若い人にとって盆栽は大変重要で心に直接響くものである。歌舞伎などは時間がかかるし知識が必要。一方、盆栽は、若い人、老人、子供が、見ただけで、声をなくすほど感動する。ところが日本人に盆栽の輸入に行くと言うと、「老人の趣味だ。爺さんがやっていた」などと驚く。盆栽が大事にされていない。日本にとって盆栽輸出の市場価値や金額価値は小さいのだろうが、日本にとっての文化価値は大きい。日本は観光でも文化でもあれほど素晴らしい国なのに PR もない。日本人はその価値を知っていないのではないか。私は毎年神田の本屋街にいって古い書籍を買ってくる。

（２）オルトレ・イル・ヴェルデ　Oltreil Verde s.r.l

所在地：ロンバルディア州ミラノ県

セルジョ・デッレ・トッレ氏
Sergio Delle Torre

1）概要・沿革

90 年代に別の経営者が創立した会社を、われわれステファーノとセルジョ兄弟が 1995 年に買収し経営をはじめた。盆栽とともに庭園用植木を扱い、庭園の設計・施工も行っている。われわれ兄弟はもともと庭木については経験があるが、盆栽ははじめてだった。　全面積 3 万 5,000 平方メートルの敷地があり、そのうち 3 万 3,000 平方メートルは庭木の栽培場となっている。

盆栽については、日本からの盆栽を扱っているのに加えて、日本から輸入した盆栽用の陶器鉢、土壌、肥料、また盆栽備品や用具なども多種そろえている。プロの盆栽インストラクターを置いて

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

おり、顧客からの盆栽に関するあらゆる相談に対応・助言のできる体制を整えている。
敷地内に盆栽クラブ「AMICI di VERDE」集会スペースを提供し、月２回、毎週火曜の夜には、会員が集まり盆栽の講習や情報交換などが行われている。さらに定期的に盆栽のワークショップやコンクールも開催し、盆栽愛好家の拠り所となっている。

２）ビジネス領域と取扱状況

・日本からの盆栽と庭木、さらに盆栽用鉢・備品用具類輸入
・中国からの盆栽用鉢、石彫刻輸入

３）日本品の輸入状況

①方法

1995～96 年当時は、日本から盆栽を本格的に輸入している企業はイタリアで３社程度だった。日本の貿易商社にコンタクトして、日本に買い付けにいった。ターゲットは、盆栽愛好家なので、盆栽は日本の盆栽のみ。中国での盆栽輸入も研究するために行ったが、弊社の所在地まで、わざわざ安価な中国盆栽を購入に来る人はいないと考えてとりやめた。
毎年、春から夏の間、１週間ほど日本に行く。事前に希望の品種など一応の目安を伝える。日本の輸出業者がそれにあった生産者をピックアップしてくれていて、丸１週間、朝から晩まで横浜から車で生産者を訪れ盆栽をセレクトする。埼玉など車で２、３時間以内の範囲の地域をまわる。一度、新幹線に５時間乗って北の方に行ったこともある。

②品種

重要なのは五葉松、シンパクをはじめ、モミジ・カエデ類、さつき類。そしてカキも。そのほか少量ずつすべての品種を購入する。輸入数量は減った。特に、害虫問題で植物検疫許可書や検疫期間が必要になったことが大きい。黒松、桜、コトニアステ、リンゴ、梨など美しい品種が沢山あるが、双方の法規などの理由で輸入ができなくて残念だ。

③購入額

FOB で 500 万円程度（2007 年実績）。現在は盆栽７割、庭木３割である。1998 年当時はコンテナで 14 台分も購入したが、2008 年と 09 年は不況もあり購入を控えている。

４） 輸入品価格構成

生産者以降の出荷価格（国内商社による取引分も含む）＝FOB100 として、船賃（40 フィートコンテナ、冷蔵機能付き、3,000～3,500 ドル程度）とイタリア通関費用（付加価値税 10%、関税８％＋検疫・通関代、国内輸送費）等で 40%ほどコストがかかり、140 で届く。
これに対して２倍から 2.5 倍程度で小売価格を設定する（FOB100 に対して 280～350 程度）。日本の盆栽は質が高いが、高価格・少量販売であるため、ある程度のマージンが必要となる。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

5）ターゲットと取扱品種の価格帯・事例

ターゲットは盆栽愛好家。日本製盆栽に興味があり、ある程度の品質を望む。盆栽を育て育成するための素材として購入するので、それに見合う品質が必要。出来上がった美しい盆栽作品を買う人は少ない。完成品ではなく、ストラクチャーだけができていて、素材として使いやすいもの、育成していくことのできるもの、その意味でポテンシャリティの高い盆栽を好む。ただ年月がたっている盆栽は意味がない。興味を惹かない。

愛好家の中心層の平均予算は1回150～300ユーロ程度で、購入は年数回。
したがって、年間予算はせいぜい1,000～1,500ユーロ。稀に一つ1,000～1,500ユーロの盆栽を買う場合もある。

五葉松は小さいもので115～120ユーロ、150ユーロ、200ユーロ程度。
モミジ・カエデ類は300ユーロ程度。

盆栽完成作品として1,500、2,000ユーロの盆栽も置いてあるが、めったに売れない。たまに高額なものを買う顧客よりは、50、100、200ユーロ程度の購入を定期的に行うクライアントが多数いることが重要だ。

6）流通・販売

盆栽については、当店での直販のみ。他の販売拠点は持たず、卸もしていない。

7）日本の盆栽市場への評価・今後の見通し

14年間、日本に行って変化をみてきた。当初は小さな路地を歩くと、小さな家や庭があって盆栽がところどころにあったが、今はそこに高層ビルが建っている。何回も日本に行って思ったのは、日本ではあまり盆栽の将来性がなさそうだということ。若い人はあまり関心がいない。古い世代が亡くなると子供はそれを売ってしまっておしまい。

日本での盆栽の買い付けで困るのは、『購入計画』が立てられないこと。日本の生産者は少ししか売れないので高く売るという発想があり、14年間毎年行っているが、価格については毎年戦いとなる。毎回、現場に行くまで、そこに何があるのかわからない。

五葉松もシンパクもイタリアでは売れないような品質のものを日本で生産している。ドイツやオランダなどでは売れるかもしれないが、イタリアでは買う側のレベルや感性が高いのでダメなものがある。イタリアの市場について生産者側は情報を持っていないようだ。

日本の盆栽の将来は、日本がどのような盆栽を提案するかにもよる。もちろん日本は盆栽の大きな巨匠であり、ナンバーワンであるのは事実である。ただし、日本はいつでも第一人者であると思っているが中国も一生懸命追いかけている。鉢についても当初は日本だけから買っていたが、中国の鉢も質がよくなってきている。常滑の鉢がいいのはわかるが、300ユーロする。中国だと40ユーロ。常滑は自分が一番いいと思っているが、中国も日本で修行をして質をあげている。

イタリアの盆栽市場は以前と比べると縮小しているが、私は楽観主義者である。盆栽について語る人、特に愛好家は増えている。とはいえ早急な発展や成長はないだろう。盆栽は、長期的な投資であり、今購入したものがすぐに結果を得るわけではない。

イタリアでは愛好家や盆栽作家の間で、盆栽についての新しい情報、技術に対する要求がとても強い。特に、日本の盆栽作家の第一人者木村正彦氏がイタリアにおける盆栽の流行を形成しているといえよう。誰もが木村氏の動向に注視している。毎月、木村氏の発表する新しい作品を興味津々で見ている。木村氏がある品種の盆栽を雑誌『近代盆栽』で発表すると、その品種に人気が集まる。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

ファッションショーと同じように『近盆』で発表された記事が２カ月後にイタリア語で雑誌に掲載されるとその品種が人気になる。木村氏がタクソスを使って仕事をした際は一時、タクソスブームとなった。盆栽の品種や、スタイルだけでなく、鉢の形や色も木村氏の影響が大きく、トレンドを形勢している。

イタリアの主要盆栽作家やインストラクターなどもその線で作品を仕上げていくため、それが愛好家全体に影響を与えている。

（３）フランキ・ボンサイ・ヴィヴァイ　Franchi Bonsai VIVAI

所在地：トスカーナ州ピストイア県ペスシャ市

ナーラ・フランキさん　（写真左）
Nara Franchi

１）概要・沿革

当地ピストイアは、イタリアだけでなく、欧州でも最も重要な苗木･植木生産拠点である。父親のコスタンティーノ・フランキ（２年前に逝去）が、オリーヴの木生産を主体とした栽培場を経営していた。その後、たまたまトリノ在住の盆栽研究家カルロ・オドーネ氏と知り合い、同氏からオリーヴの盆栽をつくることを勧められ、イタリアで最初のオリーヴの盆栽を生産するようになった。弊社ではこの地域に２万 6,000 平方メートルの栽培場をもち、オリーブをはじめ、リンゴ、コトネアアスター、ピランカタ、カシの木、ジェネプロなどの盆栽の生産を行い今日にいたっている。品種はイタリア土着品種の植物に限定している。挿し木を小鉢で育て、それから鉢を大きくして、針金を使い盆栽をつくっていく。長年の歳月のかかる仕事である。

1970 年代末に父親が中国に行き､Ficus やカルモーナなどの小さな盆栽を少量買い付けたのが東洋の盆栽購入のはじめである。その後、日本の盆栽の鉢の購入や「赤玉」などの土壌、はさみ、盆栽用具や付属品なども扱うようになった。日本の盆栽の輸入をはじめたのは 1980 年代中ごろである。スタッフを送り、最初は盆栽の鉢を扱っている日本企業を通して購入した。1992 年には、父コスタンティーノが、長年かかって蓄積したコレクションをもとにボンサイ・ミュージアムを創設した。96 年には、著名盆栽コレクターのウエザ･パッカネッラ氏の没後、同氏のコレクションが寄贈され、当社のミュージアムの一部となった。

90 年代に入ると、日本の盆栽界のマエストロである木村正彦氏や小林國男氏などを招いてのデモンストレーションや大会なども開催した。97 年からは日本から庭木やマクロボンサイの輸入をはじめた。

なお､生産に関しては､1995 年以降は一般の庭木の栽培はやめ､盆栽生産に専念することとした。日本品種の盆栽生産を試みた時期がある。トショウはこの地域は気候的には問題ない。一方、シンパクも試みたがうまくいかない。いずれにしても、手間がかかり、ビジネスベースにはならないので、断念した。

２）ビジネス領域と取扱状況

年間売上高は 100 万ユーロ程度。

オリーヴなどイタリア品種の盆栽生産が中心で、年間生産量は３万 5,000 鉢程度。日本からは庭木と盆栽、中国から盆栽輸入（盆栽輸入の国別割合：日本 60%、中国 40%）。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

３）日本品の輸入状況

①方法

同社スタッフが毎年日本に出向き、約３週間かけてマクロボンサイ（庭木）と盆栽を買い付ける。地域は埼玉、神奈川、名古屋から九州まで。四国にも行ったことがある。九州・久留米は庭木のみ。

日本に輸出業者がいて、買い付けに同行し、買ったものをコンテナで送ってくれる。大半はジェノヴァで通関する。コンテナが届いた後、ピストイアでしばらく盆栽の体調を整わせてそれから販売する。

②購入額

通常は庭木と盆栽あわせて 25 コンテナ程度。額では庭木が 70%、盆栽 30%（ほとんどが庭木用で、盆栽はせいぜい１コンテナ程度）。

FOB で 3,000～7,000 円のものが普及帯であり、小さいものを 1,000～1,500 鉢程度購入する。

FOB で７万～８万円の物も 10～15 個位を見本品的に購入するが、売るのは難しい。ほとんど売れない。

③品種

五葉松とさつきが中心。シンパクは少量。それとカエデ・モミジ。カエデ・モミジは、残念ながら昨年（08 年）と今年（09 年）は輸入できない。弊社ではカエデ・モミジの生産も行っている。ザクロも生産しているので日本から輸入はしない。ヒノキはイタリアでは人気がないので扱っていない。

４）ターゲットと取扱品種の価格帯・事例

この地域は、中部イタリアで田園地域の植木生産地であり、人口は少なく、盆栽愛好家や盆栽クラブも少ない。盆栽愛好家が直接ここまで買いにくることを想定して盆栽を扱っているわけではない。

したがって、下記に述べるように取引先への卸がメインとなっており、その最終顧客は大半が一般の人で盆栽愛好家ではない。

同社の場合、盆栽のバラエティを豊かにし、品揃えに彩りをそえるために日本製の盆栽を扱っているといえる。

したがって、日本製といっても価格の安いものが中心である。リクエストがある場合に提供する程度。日本からの盆栽は小さいものだけで、卸価格は高くても 100 ユーロ以下。

なお、オリーヴなどの自社製盆栽は上代 25 ユーロ程度、中国製盆栽は上代 10 ユーロ以下。

５）流通・販売

直接かつ定期的な取引先は 1,000 社程度以上。郊外型の「GARDEN」と呼ばれるガーデンセンターを中心に大型ショッピングセンター、Coop など。各地の花類問屋にも卸している。これらの

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

問屋が街角の花屋に商品を卸している。
　毎日、自社のトラック２台で北部・中部イタリアの取引先に盆栽類を直接配送・納品をしている。南部・島部のシチリアやサルデーニャなどにも随時輸送している。
　自社生産の盆栽が中心であり、販売流通ルートは自社産盆栽販売のために出来上がっている。上記したように、ガーデンセンターなどで一般顧客から松の盆栽が欲しいというリクエストがあった場合に提供する程度。
　当社まで直接買いに来る人はわずかである。

６）日本の盆栽市場への評価・今後の見通し
　日本の盆栽のイタリアにおける今後の見通しは、よくて現状維持、おそらく多少下降傾向となろう。輸入はこれまでの調子で輸入を続けられるかよくわからない。

　一方、イタリア品種の盆栽生産は維持している。他にも小規模な生産所はあるだろうが、自社販売流通ルートを何年もかけて積み上げてきているような企業は他にはないので実質上　栽培・販売会社としてイタリアで独占企業となっている。品質、価格の面でもまったく競合はない。

（４）バルバッツァ・ボンサイBarbazza Bonsai Srl

所在地：ヴェネト州トレヴィーゾ県

ダニエレ・バルバッツア氏
Daniele Barbazza

１）沿革
　イタリアの植木業界最大手バルバッツァ・グループ Gruppo Barbazza の１社。　同グループは、総面積６万平方メートルにおよぶ栽培場を有するほか、トレヴィゾ郊外には 5,000 平方メートルの大型ガーデンセンターの直営小売拠点も持っている。同グループは、鉢物や植木生産企業、植木流通企業、ガーデンセンター、そして盆栽専門の Barbazza Bonsai の４社で構成されている。同グループでは 20 年以上前から中国を中心とする輸入盆栽を手がけていたが、業績を明確にする上でも専門部門ごとに分社することを決意し、６、７年前にバルバッツア・ボンサイが創立された。創立後５年間で輸入高は上昇している。

　メインとなるのは、中国からの盆栽の輸入である。中国の広東に資本参画している盆栽生産企業を持ち、大量の盆栽を生産しイタリアに輸入している。AIDS 基金キャンペーンなどの際はイタリア国内の主要広場で配布される小型盆栽（５～10 ユーロ程度）を当社が毎回 5,000 鉢ほど供給している。陶器鉢などの備品も中国から輸入している。中国製盆栽の輸入企業としてはイタリア最大手の１つ。台湾からも盆栽を輸入している。日本からの盆栽と庭木の輸入は数年前から始めた。

２）ビジネス領域と取扱状況　年間売上高
・中国および台湾からの盆栽輸入、陶器鉢類輸入
・日本から盆栽・庭木の輸入

　売上高は 100 万ユーロ程度。中国と日本の盆栽輸入の割合は 金額ベースで中国 70%、日本　30%、

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

数量ベースでは中国 95%以上、日本５％以下で、この割合は当面変わらない見込み。

３）日本品の輸入状況

①方法

日本からは当初は盆栽のみで、その後、少しずつマクロボンサイも輸入するようになり、庭木の量は増えた。庭木用植木の需要は増加傾向にあるが、保管スペースの問題があるので、現在のところは盆栽と庭木は半々程度。スペースの問題がなければ庭木をもっと増やしたい。

2005 年から毎年、６月から夏にかけて東京を拠点に１週間、日本に行っている。輸出商社に同行してもらって東京から富士山が見えるところまで自動車で３、４時間の範囲を毎日まわる。他の地方の商品については、松などで四国や関西などの製品を写真でみて選ぶこともあるが、実際に訪問したことはない。

②輸入額

日本からの盆栽および庭木の合計で　毎年、2,500 万～2,800 万円程度（FOB)。そのうち盆栽は１コンテナ程度。

③品種

販売経験を重ねてきたため、選択基準は明確である

さつきはとても人気があり全体の 35%で、五葉松 30%、シンパク 30%など。その他はトショウを少し。モミジ・カエデ類は人気があるが、今年は輸入ができず残念だった。ヒノキは手入れが難しく、いい結果を出しにくいので人気がない。

４）輸入品価格構成

当社の価格政策は、価格を低く、良心的価格とし、「毎年売り切る」ことを目的としている。

FOB 価格に対し、イタリア側のコストは 30～40%程度（これもコンテナの中に庭木があれば、コストは相対的に高くなり、盆栽の場合は相対的に低くなるが、いずれにしても 30%以上はかかる)。

FOB100 に対して 130～140 が輸入コストとなる。

弊社のマージンは、40～50%におさえ、上代を輸入コストの 1.4 倍から 1.5 倍程度、最高でも２倍以下で販売しており、他社と大きな差をつけている。固定コスト（人件費）なども極力抑えて、販売価格を下げている。

少ないマージンで満足している。そうでないと売れない。このような難しい時期は、マージンを少なくしてもクライアントを満足させ、維持したい。

＜素材用盆栽の例（シンパク）＞

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

5）ターゲットと取扱品種の価格帯・事例

日本からの盆栽については、盆栽愛好家、盆栽クラブ、プロなど一部のターゲットに限定される。

この不況の中で、高価な盆栽の販売は大きく減少している。盆栽愛好家向けの「素材」の販売（上記写真参照）を中心としている。

盆栽に手をかけて質をあげ、完成度を高め、芸術作品として盆栽作品を売ろうとするところもあるが、ほとんど売れていないのが実情だ。弊社のマーケティング戦略は、愛好家が育て、手を加えていく素材を扱い販売することである。したがって、価格を抑えて、盆栽クラブ用などで素材として使う価格の低いもの、初心者用コースで使うもの、あるいは中級者が盆栽育成に使うものを提供している。「鉢付きでないもの」も輸入し、販売する。50 ユーロ程度で売ったところ、すぐに売り切れた。

シンパクについては、生垣のようなもの（自然に育っている感じ）、骨格ができていて少しアーティスティックなもの（骨格に対して少し手が入っている）といった２つのタイプがある。いずれも、これから盆栽をつくっていくための素材としての盆栽である。ただし、このようなタイプの「プレ・ポンサイ」は、その後どう育てられるか、潜在力を見る専門家の目がないと難しい。

人気の五葉松については、完成品は沢山あるが、「素材」として売れるものは日本ではオファーがない。

売れ筋の価格帯は、50～60 ユーロ程度。これ以上になると、価格に神経質になる。その次が 100 ユーロ程度のもの。高いものはごく少量しか売れない。

6）流通・販売

日本の盆栽については、直接弊社まで買いにくる。日本からの盆栽は、金額の面でエリート用の商品。大型流通などで大量に販売する可能性はない。ガーデンセンターなどに卸すのはごく少量しかない。

中国産盆栽については、弊社の流通網を用いて、全国の大型流通店舗やガーデンセンター、さらに問屋に大々的に卸している。

7）日本の盆栽市場への評価・今後の見通し

不況の今年（09 年）は別とすると、弊社もイタリアの日本盆栽市場も大きな変化はないだろう。日本からの盆栽はコレクター、愛好家だけの限定された市場であり市場が増大する可能性はないだろう。

日本からモミジ･カエデの盆栽を輸入したい。日本側も検疫面でより厳格なコントロールをして、早く害虫の問題を解決してほしい。モミジ・カエデは人気があるのに今年は、輸入できず、ビジネスにも悪影響を与えている。これが日本側の課題だ。最近は、日本に行って輸入したくても、取り扱える品種やマテリアルが減ってきていて困る。

われわれは、危機の時期も商品提供を維持しなければならない。商品を提供するのが怖いのであれば商売変えをしなければならない。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

（５）フジサト･カンパニー　Fuji Sato Company s.n.c.

所在地：ピエモンテ州トリノ県ノーレ市

ピエロ・マシエロ氏
Piero Masiero

１）概要・沿革

もともとは、道路建設業がメインで、現在もそちらがビジネスの主流となっている。

Fuji Sato Company は約 25 年前に設立されていた会社でビバイオ・カスターニョ Vivaio Castagno のグループ会社であったが、1997 年に経営権を買い取った。われわれは、元来は盆栽とは縁がなかったが、従来の盆栽および盆栽の鉢や関連品の輸入販売業を維持している。

５年制の本格的な盆栽学校を運営しており、地域の小学生用の盆栽教室も開催しているため、スクール用に種から盆栽をごく少量育てているが、販売目的ではない。盆栽・器具類の見本市などには参加することもある。他業者への盆栽類の卸はしていない。

今秋（09 年秋）にはイタリア盆栽・水石指導者会　（IBS）全国大会を当社で開催し 400 名近い盆栽関係者が集まった。

２）ビジネス領域と取扱状況

弊社のメインビジネスは道路建設業。盆栽の輸入・販売はビジネスラインにはのっていない。

３）日本品の輸入状況

①方法

以前は毎年日本に行っていたが、実は４年前に購入しすぎたため、この４年間は日本に行っていない。

日本に行く際は東京に行き、輸出業者が事前の要望に沿って生産所に案内してくれるので、それをコンテナにして発送してもらう。10 日間、毎日早朝から夜遅くまで、埼玉などいろいろな場所にいく。

②品種

五葉松、シンパク、さつきと、カエデ・モミジ類が主流。その他、少量ながら各品種を扱っている。他者と差別化するために、高価格のものを選んでいる。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

③購入内容

４年前の事例でいえば、価格帯は FOB で、20 万～70 万円レベルの大変高価な傑作作品を購入した。中・高レベルのもの。その他にもちろん小さな紅葉 200 ユーロや 5,000 円程度のものやさつき類も数多く購入してきた。合計 1,000 鉢、１コンテナ程度。その他、瀬戸で出物として名人のコレクションの鉢も購入した。

購入しすぎたため、、その後の不況もあり販売が難しい。

今年（09 年）については、サツキ、モミジ・カエデ類、シンパクについて上代 50 ユーロ程度の低価格ながらある程度の品質の盆栽を合計 200、300 鉢程度、日本から他社と共同購入するだけにとどめた。

４）輸入品価格構成

FOB の約３倍で販売。

５）ターゲットと取扱品種の価格帯・事例

ターゲットは愛好家。高価な盆栽をおいてあるが実際はほとんど売れない。愛好家が「素材」として使うものとしては、サツキ、モミジ・カエデ類で、シンパクについては上代 50 ユーロ程度の低価格ながらある程度の品質のものは売れる。また、さつきで 200 ユーロのものも売れる。

６）流通・販売ルート

弊社で直売。他の流通ルートにはのせていない。

７）日本の盆栽市場への評価・今後の見通し

イタリアでは、大きな流通センターなどで、AIDS 撲滅や癌研究用のキャンペーンで中国製の安い盆栽が基金集めに使われていることで盆栽のイメージが下がってしまったと思う。5～10 ユーロ程度で購入し、すぐに枯れてしまう、「使い捨て」のイメージを普及させたことは残念なこと。そのため、盆栽が持つ潜在的なターゲットの 50%にこれでダメージを与えてしまったのではないか。

われわれは本当に良い盆栽を輸入し、それを人々にわかってもらおうと考えているが、高価な盆栽は現実にはほとんど売れない。イタリアでは盆栽インストラクターや愛好家が、互いに盆栽を交換したり譲り合ったりするので、高価な盆栽の市場は成立しないといっても言い過ぎでないように思う。

６． 有力者インタビュー

有力者インタビューとして、50 年以上盆栽に取り組んでいる IBS（イタリア盆栽・水石指導者会）初代会長のジョヴァンニ・ジェノッティ氏とクレスピ・ボンサイの創立者であるルイジ・クレスピ氏というイタリア盆栽界の権威であるお二人と、30 代の若手として活躍するイタリア盆栽クラブ連盟（UBI）会長のマウロ・ステンベルガー氏およびインストラクターのアルフレッド・サラッチョーネ氏にお話を伺った。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

（１）ジョヴァンニ・ジェノッティ氏　IBS
（イタリア盆栽・水石指導者会）初代会長

Giovanni　Genotti
1933 年生まれ　トリノ市郊外在住

＜盆栽との出会い＞

特別な出会いをした。医院の待合室でたまたま「鉢の上で育てられた小さな植物」を見た。中国から来たものに違いない。一目見たときに魅惑されてしまった。ほんの小さな鉢の植物だった。もともと、小さいころから植物が好きで、植物にしか興味がなかった。近くの森や林に木々を見に行くのが楽しみであり植物には深いつながりを持っていた。

もう一つの出会いは、あるとき日本製のカレンダーを見たことである。そのカレンダーに、盆栽の写真がいくつかあった。まさにこの二つの偶然の出会いから私の「盆栽人生」が始まった。1950 年ごろ、私が 17 歳のころだった。

とはいえ、最初の出会い（医院で見た当時）当初は、これが何なのかよくわからなかった。早速、自分も鉢で植物を育てはじめてみたが、なんだかよくわからなかった。カレンダーの写真を見たことで、これらの鉢植えの植物はある種の「フォルム（形体）」をもっていることに気づいた。とはいえ、まだ BONSAI については何も知らず、BONSAI という言葉自体も知らなかった。それから、自分でも鉢に直接種をまいて育てはじめた。しかし、間違いに気づいた。盆栽は 90%以上のものがすでにある程度育ったものを用いるのだから。その後、種をまいて、普通に育て、3、４年たってから、樹形を整えだした。

しかし、教えてくれる人もなく、何の知識も情報もないので、全部枯らしてしまった。その後もあらゆる失敗をしつくした。文字どおり、トライ・アンド・エラーの連続であった。私は植物が大好きであったが、農学の勉強をきちんとしたわけではなく（大学の専攻は化学科）、きちんとした知識がなく、情熱ばかりという状態だった。

1964 年に大きな出会いがあった。私と同様に自己流でとことん盆栽に取り組んでいたトリノ在住のオットーネ氏と知り合ったことだ。同氏は英語ができるので、イギリスからすでに文献を取り寄せて読んでいた。英語の盆栽の本をはじめて目にし、そこに掲載されていた写真をみた。これを読んで、多くのことがわかった。二人の共同作業となって助け合って多くのことを発見･理解しあうようになった。この本を熟読し、またそれまでに各自が試行錯誤し、失敗の連続という経験をもとに、少しずつ「盆栽」らしい、興味深いものをつくるれるようになった。

＜はじめて本物の「日本盆栽」を見る＞

1966 年、ジェノヴァで開催された見本市 EUROFLORA MONDIALE で、生まれてはじめて本物の日本製盆栽を見た。ドイツのインポーターが日本から輸入し、それを出展したのだった。20 個ほど展示されており、私は２つを購入した。五葉松とシンパクを１つずつである。

これらの盆栽を見たとき私は、言葉をなくし、体中が空っぽになるような気持ちになった。　それまでの 10 数年間、自分なりに試みてきたが、目の前にあまりにも素晴らしい「実物」をみて、こんなもの私につくれるわけないとも思った。はるか昔のカレンダーの写真、その後、英国の盆栽の本に載っていた少しの写真、それ以外、盆栽を見たことがなかった。最初の出会いから 12、13 年がたっており、その間の「失敗の連続」、それこそが、迅速に盆栽づくりの沢山のことを習得し、

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

盆栽を創るためのすべてのベースとなったことを強調しておきたい。

私は日本人が教えてくれないことを、自分で多くのことを理解することができた。ありとあらゆる間違いをしでかしてきたので、多くのことをすぐに理解することができた。このあと日本に出向いて、盆栽のデモをみたときも、多くのポイントをすぐに理解できた。「ああ、そうか」と。ここをこうしなければいけなかった、この時期にこの作業をしなければいけなかったなど。かつては梅の盆栽をつくるには、30 年はかかると思っていたが、今では、５年間で形をつくることができる。というのも、本当に数知れない間違いをしでかしていたので、どの時期にどのような手入れをするべきか、よくわかったからである。特に、盆栽の各作業を行う時期、タイミングというものがわかるようになった。落葉樹の場合、針葉樹の場合など。

＜あらゆる学習の機会を活用＞

これまで、盆栽に関するあらゆる「学校」や「講習会」に参加し、あらゆる試験を受けた。日本には６、７回行き、学習の機会を求めた。カリフォルニアに行って１日セミナーに参加したこともある。木村正彦先生のコースもすべて履修した。

多くの学校･講習会の中で私にとって最も有益だったのは、鈴木英夫先生の「SCUOLA　D'ARTE BONSAI」の盆栽スクールで、全８年間のコースをすべて履修･卒業した。すでに多くの経験を蓄積してから通ったので大変役に立った。一言説明をきくだけで、その意味することを理解することができた。また先生が私の盆栽に寄せる「視線」でどこが間違っていたかも感じ取ることができた。多くの日本の先生を知っているが、イタリア人にとって最高の指導者だと思う。謙虚で、潔癖な方だ。イタリア人にわかるように理論をわかりやすく教えてくれた。　日本では「説明をせず」「習うより　慣れろ」「観察をせよ」というのが教育方針のようで、説明はせず、「デモ」だけを行う先生も多い。だが、少し経験があるものは理解できるが、初心者には難しい。やはり、理屈や理論をある程度説明してもらわないとイタリア人には理解しにくいだろう。

その後、正式な試験に合格し、盆栽インストラクターの資格も認定された。19 人受験し、受かったのは私を含む２人だけだった。日本盆栽協会の履修書も取得した。

ところで、私が盆栽を続けてこられたのは、このトリノ近郊の小さな町の理科系高校で数学･理科の教師という仕事で授業が終わると、比較的自由になる時間が多かったためだと思う。

＜イタリア盆栽の世界について＞

当初、盆栽はエリートのものとしてとらえられ、また「好奇心」で盆栽を見る人が多かった。その後アマチュア愛好家の間で根強く普及し、現在は「ポジティブな関心･興味」がベースとなり、着実な活動が続けられている。

残念なのは、価格が高いこともあり、一般の人が「本物の日本盆栽」を買うことはごく稀なことだ。Ficus など安価な中国製の盆栽を「室内鑑賞用鉢物」として利用している人が多い。

盆栽がイタリアに本格的に入ってきた初期の段階で、この市場を、盆栽についての情報欠如、あるいは商業主義によってダメにしたといえよう。たとえばイタリアの気候に合わない盆栽を売って、どれも枯らさせてしまい、消費者の関心を急速に低下させたこともある。

私は現在の盆栽の専門家や指導者たちの方向性に対し、少々疑問を持っている。というのは自然から遠ざかり､「アーティスティックな面を強調する」方向性を感じるからであり､私は反対である。盆栽を、自分を表現する「アート」というとらえ方には納得できない。私は自然に密着した「アート」というとらえ方をしたい。盆栽は植物が本来持っているものを表現するアートであるべきだ。自然の美しさ、その最も優れた瞬間を表現しようとするアートであると私は理解している。

盆栽指導者たちは、あらゆる植物が本来もつ魅力や性向を理解し、あらゆる植物がもつその最も芸術的な側面を表現させることができなければならない。ところが現実には、指導者たちの関心は、「五葉松」と「シンパク」だけに集中しており、他の植物に対して関心が薄い。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

盆栽を教える際は、まずは植物の基本を知らなければならないが、それをきちんと教えないところもある。初心者に盆栽を見せて、即、針金で形の補正などのデモを行い、関心を惹こうとするものもいる。これは最後にやることであるのに。

＜日本からの盆栽について＞

私にとって、「盆栽」とは「日本の盆栽」を意味する。　ただ、日本から輸入されている盆栽のこちらでの価格が高すぎる。

日本で見た盆栽の大部分は、盆栽生産所で準備されているものだが、これが「完成された盆栽」の価格で販売されていること、これが間違いだと思う。埼玉県の大宮に行って「盆栽作家」の作品を購入するのであれば価格が高いのは納得できるが、２万鉢も同じ種類で同じような形のものが並んでいるものを「盆栽」として販売するのはいかがなものだろうか。これらは、盆栽とはいっても、これから手をいれて仕上げていくものであり、盆栽の完成品ではない。欠陥のある品でも日本製の鉢に入っていればこれで「日本の盆栽」となる。

（２）ルイジ・クレスピ氏　クレスピ・ボンサイ
創立者

Luigi Crespi
1938 年生まれ　ミラノ県在住

＜日本の盆栽との出会い＞

1959 年、ちょうど 50 年前、私が 21 歳の時にはじめての盆栽との出会いがあった。ジェノヴァの温室で、極東から蘭を輸入していた商社が日本のサツキ、銀杏、シンパクの盆栽を一緒に輸入していた。「これは何ですか」ときくと「ボンサイだ」と言われた。何がなんだかわからなかったがすぐに購入した。私の姉の嫁ぎ先（義兄）は５代続いた花屋・造園業を営んでいたので、私は 13、14 歳頃から、義兄にいろいろ連れて行ってもらった。ジェノヴァにも一緒にいった。ジェノヴァで買った銀杏の盆栽は当時で 90 歳だったが、今もわが家で元気に育っている。

＜植物を育む喜び＞

ボローニャの出版社が 1964 年にイタリア語で出版した村田憲司著の盆栽入門書を購入した。今も持っており、副題が「Come E ducare Alberi.（いかに植物を育むか）」であった。イタリア語に訳された初めての盆栽の本で歴史的な書籍である。この本をたよりに盆栽に本格的に取り組むようになった。「Educare Alberi」という言葉がとても気にいった。子供を教育するのと同じで、植物を「はぐくむ」という意味で好きだ。Tagliare（切断する）ではない。Formare（形成する）でもない。植物に対する敬意がある。植物は自ら成長するパワーを限定された器（空間）の中で生存していく智恵・知性を持っている。それを私は大切にしている。盆栽棚を通るだけで、どのボンサイには水を、肥料を、どういう手当てをしなければいけないのか、私に伝えているのですぐにわかる。植物は多くのメッセージをいつでも発信している。

＜盆栽への敬意を＞

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

盆栽の輸入を始め、その後、盆栽ミュージアムも創立した。盆栽がその辺に放って置かれたり、地面に打ち遣っておかれるをみるのは忍びなかった。大事にされていないのを見るのは大変残念だったため、盆栽の尊厳のために作った。100 年の盆栽に対しては尊厳とまではいわなくても、敬意が必要だ。私が亡くなっても私の大切にした盆栽は残って生き続ける。これほど大きなメッセージを継続して発信していくものは少ない。

＜最近の盆栽の傾向について＞

昨今残念なのは、盆栽の枝を大幅にへし折ったような形で作って展示していることもあることだ。もっと植物の生物としての特色を知らなければならない。成熟した盆栽をつくるには時間がかかる。ところが多くの人がデモで盆栽を大きく裁断したり、ハデな形に彫刻のように扱ったりして、ショー化してしまうことがあるのはとても残念なことだ。日本の盆栽の持つ基本のルールをもっと浸透する必要があると考えている。

（３）マウロ・ステンバーガー氏　イタリア盆栽クラブ連盟　UBI会長

Mauro Stemberger
1979 年生まれ　ヴェネト州フェルトレ市在住

＜盆栽との出会い＞

14 歳の時に始めた。学校の帰り、たまたま花屋で中国の小さく安価な盆栽を見た。小さいころから植物や自然がとても好きだった。盆栽は、手の中に自然の世界を作るところに惹かれた。街にあったクラブ（1990 年創立）に 1993 年から通いはじめ、初心者コースなどに通ったが、高校を出て兵役に就いた後はヴェネツィア大学の建築学部に通ったので、その間はクラブに通えなかった。

2003 年から全国レベルの大会に自分の盆栽を出展するようになり、独学で多くの盆栽を持つようになった。本業は建築家だが盆栽にも真剣に取り組んでいる。

インストラクターの友人や先輩から多くを学び、次第にコンクルールなどで大きな賞を受賞するようになった。数年前から地元フェルトレ市の盆栽クラブの会長をつとめている。そして、昨年（08 年）イタリア盆栽クラブ連盟 UBI の幹部改選で立候補し、当選した。真面目で情熱があれば何でも乗り越えられると思っている。

＜日本の盆栽について＞

盆栽の雑誌に大きな関心があった。会長になると雑誌の編集長になれるので、デザインも記事内容も革新した。記事のコンテンツは質・量とも改善し、特に日本の雑誌から最新の盆栽記事を購入し、翻訳して掲載している。

盆栽の技術、自然を学ばなければならない。日本の文化やメンタリティはイタリアのものとは違う。日本の文化を学ぶが結局はイタリアなりの盆栽をつくることになるのだと思っている。日本の盆栽の高い水準のものは非常にレベルが高いし、傑作盆栽や歴史的な盆栽がある。

＜イタリアの盆栽の将来＞

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

容易ではない。プロフェッショナルが目指すのは高い芸術性をもつ盆栽を作ろうとする傾向だが、愛好家は、残念ながらその高いレベルの盆栽の歩みにはついていけてない。トップの人々は高い水準にあるが、愛好家のレベルまで盆栽文化が普及しているわけではない。多くの場合、さまざまな理由で最新の盆栽情報がそのレベルまで流れているわけではないし、愛好家の方もそこまでは望んでいないこともある。強い関心がある人々だけに受け入れられる。

より良い盆栽をつくる刺激を与えること、そしてその刺激を与え、感動を与えることが UBI 会長としての私の役割だと思う。そうすればもっと素晴らしい盆栽にすることができると思う。

（４）アルフレッド・サラッチョーネ氏　盆栽インストラクター

Alfredo Salaccione
1973 年生まれ　ミラノ市在住
（2009 年資格認定）

＜盆栽との出会い＞

13 歳で始めた。ミラノの中心地にあった盆栽専門店（現在はない）に行き、両親が日本の小さなモミジの盆栽と本をプレゼントしてくれた。すぐに情熱を感じて、３、４鉢を持つようになった。ミラノ市内の共同住宅に住んでいたが、中に大きな庭と畑があった。そこで種を植えたりして鉢を育て、盆栽初歩コースに通ったりした。盆栽は金がかかるが、子供なのでお金はなかった。そのころクレスピの「BONSAI ＆NEWS」が創刊された。第１号を持っている。そして日本でも修行をしてきた盆栽作家のサルバトーレ・リポラーチェと知り合い、99 年から彼のスタジオに通うようになった。もっと本格的に習得したいと思ったからだ。そこで３年間見習いをした。大学の生物学部に通いながら、午後は毎日 14 時半から 17 時半までミラノ市内の彼のスタジオに行った。彼は南部カラブリア出身なので、地中海やヨーロッパ土着品種の盆栽作りに専念した。非常に才能があり、大活躍している。

その後、2005 年に Oltreil Verde に呼ばれたのでここで働くようになった。盆栽クラブの指導をしているほか、顧客への助言をしている。今年（09 年）、IBS の盆栽指導員の資格を認められた。少し前からこの資格に挑戦したいと思っていたがまだ力不足と思っていたので、今年こそはという気持ちになった。合格して最高に嬉しい。07 年には、UBI の「若きタレント」賞を授賞し、イタリアを代表してヨーロッパの大会 EBA （ヨーロッパ盆栽協会）に参加した。

＜盆栽インストラクターの生活＞

イタリアでは、盆栽だけで食べていける人はまだ少数。10 数人程度が、盆栽だけでプロとして生活しているのではないだろうか。Oltreil Verde には金曜と土曜に行く。ここのクラブでは、年間を通して毎月２回、仕事の後の火曜の晩に集まっている。各人が自分の盆栽を持ってくる。夕食会などもする。会員が土曜にもやってきて、おしゃべりをしたりしている。それとは別に年間日曜に５回、セミナーをする。他の日は、各地のクラブからデモや指導などで招聘されている。年５回指導にいき、５年間かけて立派な盆栽に育てている遠隔地のクラブもある。私の鉢をみて、このようになりたいと思って習い始める人もいる。

盆栽の素材の選択も厳しい。中レベル以上の盆栽作家はかなりの情報を持っている。これは日本

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

からの盆栽作家の来伊も大きく貢献している。レベルは高いと思う。

＜日本の盆栽について＞

日本の品種はとても美しい。特にシンパクは葉の部分がコンパクトで素晴らしい。イタリアの苗木センターでもイタリア産のジェネプロはあるので、最初はこれを使うが、品種としては途中で嫌気がさしてくる。日本のほど美しくないからだ。何年か経つとイタリアのジェネプロでも幹の部分はなかなかいい形をしてくる。それでこれを使って、日本のシンパク・イトイガワを「接ぎ木」をする。毎年、イトイガワの枝から、小さな接ぎ木を準備して、イタリア品種の幹に日本品種の枝葉。イトイガワの葉は非常に美しいのでこれを使う。

モミジやザクロに関して、アマチュアは小さな鉢を購入する。アーティスト的な人は鉢をだんだんと変えていく。落葉樹の場合は待ち時間が長いので、すぐに何かをしたい人は落葉樹のテンポを待っていられない。したがって盆栽作家は結果が早く出る針葉樹を好む。落葉樹の場合は人間が介入する部分が少なく、時間をかけて成長を待たなければならない。イタリアのコンクールなどもレベルが上がっているので､落葉樹で参加し入賞するには20年くらいかけた盆栽でないといけない。時間がかかりすぎる。若い人で早く評価を得るには、針葉樹で勝負する。ある一定の年齢になれば落葉樹の楽しみがあるだろう。しかし針葉樹は針金で勝負する。大きな介入などの醍醐味がある。

日本の盆栽は大変重要だ。最近、とても質の高い日本の盆栽を見る機会があり、感動した。木村正彦氏はイタリアおよび欧州で大変有名になった。ボンサイを近代化したのではないか。緻密な仕事で若い盆栽作家を熱狂させた。若手が熱心であり盆栽を大きく大胆に介入するのは若者の喜び。日本のよう剪定だけをしている老人の趣味ではない。イタリアの盆栽の世界は生きていてアクティブでダイナミズムがある。イタリアでは若くて野心的な人がこの世界に参加している。イタリアでは盆栽は欧州の中で最も成長した。ミラノでも長い歴史のある美しさの中で育っているので、美的感覚がすぐれているのだと思う。そして盆栽を通して美意識を発信しているのだと思う。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

７．イタリアにおける日本盆栽市場　―まとめと課題―

（１）日本盆栽の輸入規模

イタリアによる日本からの「HS コード 060290（その他の生きている植物・その他のものに含まれる、盆栽（BONSAI）、庭木 」の輸入額（2008 年）は、前年比 44.6%増の約 350 万ユーロとアジア諸国の中で最多であった。しかし、業界の推定では、そのうち８割は「庭木」の輸入であり、「盆栽」は額として 70 万ユーロ程度である。また、庭木の輸入は増加する一方で、盆栽は減少傾向にある。

盆栽に限ってみると、輸入額は中国がトップとなり、日本は中国の３分の１程度となる。

（２）イタリアにおける日本盆栽の購入層

日本産の盆栽を購入するのはどのような購入層であろうか。

日本産盆栽の購入層は、「盆栽愛好家」、「盆栽インストラクター」、「盆栽作家」そしてコレクターの人々が中心で、これら愛好家は、中国の盆栽を「商業盆栽」としてはまったく考えていない。

一方、一般の人々の盆栽についての知識や関心はそれほど高くない。日本産盆栽は価格が高いこともあり、中国など安価な商業盆栽を観葉植物や室内装飾用鉢物の一種として購入している傾向がある。

このように、「愛好家用の日本産盆栽」と「一般人向けの中国産盆栽」と、市場は大きく二極化の傾向を示していると言える。

購入層別の推定人口と購入内容に関して、下表のように整理することが可能であろう。

表 10　購入層別人口（推計）

購入層	推定人口	日本産盆栽	中国産盆栽
盆栽愛好家	7,000 名	○	X
盆栽インストラクター、盆栽作家など	数十名	○	X
コレクター	10 名前後	○	X
一般人	－	X	○

（３）イタリアにおける日本の盆栽の位置づけ

１）日本発の盆栽最新情報の普及

盆栽の主要定期刊行物である BONSAI&NEWS、BONSAI.IT とも、日本の盆栽専門誌と契約を交わして日本の盆栽作家による最新の記事がイタリア語で掲載されている。

また、日本の多数の盆栽作家が頻繁にイタリアに招聘され、大会の審査員や特別デモンストレーション、ワークショップなどに出演している。さらに、イタリアの熱心な盆栽愛好家は、東京で毎年２月に開催される国風展を訪れたり、日本の盆栽作家のもとで修行や教えを受けるものも少なくない。

したがって、日本の盆栽の素晴らしさに対する評価・憧れは愛好家の間で非常に高いものがある。

２）日本の盆栽品種に対する評価

輸入業者および愛好家へのインタビューなどから、日本の盆栽品種に対する「嗜好」やコメントは以下のようにまとめることができよう。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

表 11　日本の盆栽品種に対する評価（まとめ）

学名	日本語	評価（好き嫌い）	主なコメント
Pinus pentaphylla	五葉松	非常に高い評価	大変美しく、誰もが好んでいる。
Juniperus Chinensis	シンパク	非常に高い評価	人気が高い。シャリ、ジンなど、針金の入れ方や形成に技術が必要だが、手を入れれば反応も早く、見栄えがする。やりがいがある。
Rhododendron lateritium	さつき	非常に高い評価	美しく見事な花で広く好かれている。
Acer buergerianum	カエデ	高い評価	非常に美しい。紅葉の美しさは比類ない。ただし、育つには時間がかかるのですぐに成果はでない。ゆっくりと成長を見ることを好む人が扱う傾向がある。
Acer palmatum	モミジ	高い評価	
Punica	ザクロ	一部で評価	それなりに味がある。ただし、庭園などでいらなくなった古い幹を使って盆栽にして育てることも普及している。
Diospyros	柿木	一部で評価	それなりにいいものだが、高度な盆栽は少ない。実のなる時期に人気が出る。
Juniperus rigida	トショウ	一部で評価	イタリア北西部は冬の温度が低く育たない。北東部では可能。菌類が生えるのも問題。
Chamecyparis obtusa	ヒノキ	評価が低い	葉の形が平面的で美しくない、成長も遅く手入れの甲斐がないなど、好まれない。
Lagerstoemia indica	サルスベリ	評価が低い	好まれない。
Euonymus	ニシキギ	非常に評価が低い	樹形が好まれない。
Citrus	柑橘類	まったく評価されていない	論外。魅力が感じられない。

３）日本盆栽に対する愛好家のニーズ

上記のように、日本の盆栽の特定の品種、特に「五葉松」、「シンパク」、「モミジ・カエデ」そして「さつき」の５つについては評価が高い。

しかし実際には、価格が高いこともあり、完成された美しい日本の盆栽を購入する人はごく少数であり、大多数の愛好家は、「素材」として使えるものを強く希望している。「鑑賞する」ことを楽しむための愛好家はほとんど存在せず、自らが時間をかけ、手間をかけて盆栽を育てていくその過程、作り上げる達成感を楽しんでいるため、日本の盆栽についても、適当な価格で、「原素材」を求めたいという要望が強い。

４）価格帯について

したがって、輸入業者および愛好家へのインタビューで強調されているように、高い盆栽を買う人はごくわずかで、実際に、愛好家が１度に購入する盆栽は、50 ユーロから 100～150 ユーロ程度のものが中心。質の良いものは 300 ユーロ程度までで、このレベルの購入は年に数回程度、という

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

のが平均像である。愛好家クラブの会員層をみても、特別なエリート層は少なく、普通の会社員、公務員、自営業者や年金生活者が中心層であることからも、盆栽に向けることのできる予算がこのレベルであることは想像がつきやすいだろう。

５）欧州土着品種の盆栽の普及

イタリアにおける日本盆栽の今後を考える上で、もう一つ留意すべき点は、欧州でもイタリアでも、盆栽のプロは欧州の土着品種で盆栽を作り、その価値を強調する傾向にあることだろう。したがって、自分の生徒たちにもそれを勧める。素材については、山採りをして入手する、あるいは苗木センターで普通の木を求めて栽培することが普及している。日本の品種に似た松の木などを入手することが容易である。

また、日本品種の盆栽をつくる際も、庭木としてすでにイタリアに入っている苗木を通常の苗木センターで購入する場合もある。また出来上がった見事な盆栽は相互間、あるいは弟子などに内輪で売買したり委譲したりすることもある。

６）高額品は日本で直接購入

さらに、輸入された日本盆栽の高額品がイタリア市場で売れない理由として、愛好家やプロが日本で直接割安に購入してくるためという指摘をする輸入業者もいる。愛好家インタビューの中でも、この盆栽を日本で求めてきた、あるいは知り合いに買ってきてもらったという証言をいくつか聞くことができた。

（４）日本の生産者側の問題点・課題

イタリアに日本の盆栽が直輸入されるようになって 30 年近く経過したが、この間、様々な日本の盆栽指導者の尽力もあり、実践愛好家やプロの指導者などが多数育ち、イタリアは欧州の中でも愛好家の数が多く、最も盆栽文化の普及しレベルの高い国になったと言われている。現在も名高い日本の有名盆栽作家の動向に対する注目度はとても高く、日本の盆栽界の最新情報がイタリアの盆栽業界には続々と伝わってきており、日本の盆栽および盆栽技術・美学に対する関心は依然として高い。盆栽文化＝日本文化ということで、日本文化の発信やイメージアップに盆栽が果たした文化的役割は格段に高いものがあるといえよう。

日本産の盆栽に対する評価は高く、買いたい、育てたいという願望は多いものの、日本産の盆栽は価格が高価なこともあり、実際に購入できる者は限られている。盆栽のプロや愛好家は自生地の土着品種を用いて見事な盆栽を育てるようになり、盆栽文化の「イタリア化」が定着度を増している。

その結果、盆栽文化の浸透が日本産盆栽の輸入増大には必ずしもつながらないという、逆説的な現象を生んでいるといえよう。

このような状況下では、イタリアにおける日本からの輸入盆栽市場の見通しは、良くて 現状維持、あるいは緩やかな減少傾向と言われている。輸入業者をはじめ業界関係者などから指摘された内容を整理すると、イタリアへの輸出を目指す日本の生産者に対する問題点は下記の４点に整理できよう。

これらの課題に日本側がどう対応するかで、日本からイタリアへの盆栽輸出の今後の方向性が見えてくるのではないだろうか。

１）盆栽の病害虫の問題

日本の盆栽の病害虫の問題と、それに伴って人気の品種であるカエデ・モミジが輸入できないこと、また、五葉松やシンパクについても検疫が厳しく、管理維持に時間とコストがかかることを指摘する輸入業者が多かった。買いたいものが十二分に購入できず、ビジネスチャンスを失うと嘆き、日本側で病害虫の検疫をよりきちんとしてほしいという要望も少なくない。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

２）生産者側の輸出に対する姿勢・意欲

日本の生産者側がどれだけ輸出に積極的なのかよくわからないという声も聞かれる。生産者側は高齢化しそれぞれ孤立していて、独自の道を進んでいるようで、互いの情報交流も見られない。イタリア（および海外）の盆栽市場の動向や好み、ニーズなどを探ろうとする動きや情報収集の姿勢、輸入業者と相互に対話をしてより良いオファーを出そうという意欲は感じられない。したがって、輸入業者としては、日本の輸出商社に全面依存して、その案内のもとで個別訪問をするしか選択の余地がない。

盆栽生産地で生産者同士が協力して輸出の仕組みを作るなど、産地の輸出に対する取り組みがあっても良いのではないかという声もあった。

３）イタリアの愛好者の要求する「素材」供給への対応

すでに何度も述べてきたが、イタリアにおける日本盆栽の主たるターゲットである「盆栽愛好家」が購入を望んでいるのは、高価で美しい盆栽の傑作ではなく、自らの盆栽を育てていくための「素材」となる盆栽である。品種は、五葉松、シンパクが中心となり、さらにさつき、モミジ・カエデ類が人気品種となる。将来的な潜在力はあるが、価格はこなれているものが求められている。輸入業者もその種の「素材」となる盆栽を求める傾向が強まっているが、日本市場では高価で立派な盆栽は沢山あるものの、このような盆栽を見つけることが楽ではないといわれている。

「素材」として適切な盆栽が多数存在するのか、またこのような素材提供がビジネスとして採算が成り立つのかは不明だが、日本の盆栽生産家に、このようなニーズに応える体制が有るかどうかによるのかもしれない。

４）イタリア人個人客への直接販売について

イタリアの輸入業者等から指摘されたのは、イタリアからの個人客に対し、正規の輸入業者に対する価格よりも安い価格で盆栽を提供する問題である。

そのため、輸入業者からは、正規のルートを通り輸入した盆栽は価格競争力を失い、市場にダメージを与えているとし、日本の盆栽業界に対して不信感を抱いているところもある。今後、日本の生産者側のこの問題提起に対する対応が課題になるとみられる。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

資料編（イタリア）

１．盆栽の小売価格（事例調査）

（１） 店舗名：クレスピ・ボンサイ（Crespi Bonsai）本店
所在地：ロンバルディア州ミラノ県

表 12　小売価格表

写真番号	品種	年数	小売価格（ユーロ）
C1	五葉松 1	-	2,100
C2	五葉松 2	-	1,500
C3	五葉松 3	35 年	420
C4	五葉松 4	25 年	238
C5	五葉松 5	18 年	155
C6	五葉松 6	14 年	78
C7	ひのき 1	30 年	320
C8	ひのき 2	-	180
C9	ひのき 3	-	150
C10	カエデ	-	1,150
C11	カキ（SENNARI）	-	1,290
C12	モミジ	-	1,450
C13	さるすべり	30 年	395
C14	ザクロ 1	-	1,290
C15	ザクロ 2	-	395
C16	シンパク 1	-	750
C17	シンパク 2	20 年	320
C18	シンパク 2	8 年	65～100
C19	シンパク 4	9 年	26
C20	売り場風景	-	-
C21	売り場風景	-	-
C22	売り場風景	-	-

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

（２）店舗名：ヴィヴァイ・カスターニョ（Vivai Castagno）
所在地：ピエモンテ州トリノ県

表 13　小売価格表

写真番号	品種	サイズ	小売価格　（ユーロ）
V１	五葉松 1	特大	価格なし
V２	五葉松 2	大	1,500
V３	五葉松 3	中	720
V４	五葉松 4	中	300
V5	五葉松 5	小	70
V6	トショウ	小	95
V7	シンパク 1	特大	6,200
V8	シンパク 2	大	1,050
V9	シンパク 3	中	220
V10	シンパク 4	中	200
V11	シンパク 5	小	130
V12	ザクロ 1	大	1,200
V13	ザクロ 2	小	90
V14	ザクロ 3	小	70
V15	モミジ 1	大	価格なし
V16	モミジ 2	中	195
V17	モミジ 3	中	150
V18	モミジ 4	小	85
V19	カエデ 1	大	5,500
V20	カエデ 2	中	500
V21	カエデ 3	中	400
V22	カエデ 4	小	75
V23	さつき 1	大	3,000
V24	さつき 2	中	720
V25	さつき 3	中	480
V26	さつき 4	中	380
V27	さつき 5	小	75
V28	売り場風景	-	-
V29	売り場風景	-	-
V30	売り場風景	-	-
V31	店舗看板	-	-

注：同社は、ピエモンテ州で最大規模の植木の生産・販売企業で、長年、日本からの盆栽も輸入・販売していたが、現在は事情により４、５年間は盆栽輸入を中断している。ただし日本産の盆栽の在庫を多数保有しており、小売は行っている。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

２．小売価格調査対象写真

（１）店舗名：クレスピ・ボンサイ（Crespi Bonsai）本店

C1 goyoumatu 1

C2 goyoumatu 2

C3 goyoumatu 3

C4 goyoumatu 4

C5 goyoumatu 5

C6 goyoumatu 6

C7 hinoki 1

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

C8 hinoki 2

C9 hinoki 3

C10 kaede

C11 kaki sennari

C12 momiji

C13 sarusuberi

C14 zakuro 1

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

C15 zakuro 2

C17 sinpaku 2

C19 sinpaku 4

C21 uriba 2

C16 sinpaku 1

C18 sinpaku 3

C20 uriba 1

C22 uriba 3

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

（2）店舗名：ヴィヴァイ・カスターニョ（Vivai Castagno）

V1 goyoumatu 1

V2 goyoumatu 2

V3 goyoumatu 3

V4 goyoumatu 4

V5 goyoumatu 5

V6 tosyou

V7 sinpaku 1

V8 sinpaku 2

V9 sinpaku 3

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

V10 sinpaku 4

V11 sinpaku 5

V12 zakuro 1

V13 zakuro 2

V14 zakuro 3

V15 momiji 1

V16 momiji 2

V17 momiji 3

V18 momiji 4

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

V19 kaede 1

V20 kaede 2

V21 kaede 3

V22 kaede 4

V23 satuki 1

V24 satuki 2

V25 satuki 3

V26 satuki 4

V27 satuki 5

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

V28 uriba 1

V29 uriba 2

V30 uriba 3

V31 Castagno

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

３.「その他の生きている植物（060290）」の輸入動向統計（参考）

表 14　東アジア諸国からイタリアへの輸入動向（2009 年１～６月、品目コード：060290）

	輸入額（ユーロ）	構成比（%）	輸入量（kg）	構成比（%）	平均単価（ユーロ/kg）
日本	2,988,882	56.4	1,132,953	38.5	2.64
中国	1,841,799	34.8	1,552,370	52.7	1.19
台湾	201,704	3.8	136,311	4.6	1.48
タイ	58,663	1.1	11,940	0.4	4.91
シンガポール	74,227	1.4	4,970	0.2	13.94
韓国	111,137	2.1	84,000	2.9	1.32
インドネシア	20,790	0.4	21,956	0.8	0.95
マレーシア	1,585	-	18	-	88.06
その他	0	0	0	0	0
東アジア計	5,298,787	100.0	2,944,518	100.0	1.80

（資料）国家統計局（ISTAT）データから作成

４．関連機関・輸入企業等リスト

（１）盆栽関連団体

IBS　（Colleggio Nazionale Istruttori Bonsai e Suiseki ）イタリア盆栽・水石指導者会
＜本部＞　Str.Comunale Saler 10,
Drusacco 10080
Vico Canavese (TO)
＜事務局＞Via Montebianco 21
20040 Cambiago（MI）
Tel/Fax：02.953435022
携帯：339.2377902
Email：segreteria@collegioibs.it
http://www.collegioibs.it

UBI　（UNIONI BONSAI ITALIANI ）イタリア盆栽クラブ連盟
＜事務局＞Tel/Fax：0113358818
携帯：328.4240464
Email：granato@ubibonsai.it
http://www.ubibonsai.it（イタリア全国の加盟クラブ全リスト参照可能）

日本盆栽作家協会ヨーロッパ支部
＜事務局＞Tel/Fax：049.9915890
携帯：3495138185
Email：info@sakkakyookai-e.com
http://www.sakkakyookai-e.com

（２）日本産盆栽の主要輸入･取扱業者（盆栽専門店舗）

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

ロンバルディア 州
Crespi Bonsai（Crespi Srl.）
＜本店＞
S 33 del Sempione 37
2015 Parabiago (MI)
Tel：31.491850
Email：info@crespibonsai.com
http://www.crespibonsai.com
＜ミラノ店＞
Via Boccaccio, 4 20123 Milano
Tel：02.48193301
＜ブレーシャ店＞
Via Saffi, 1 25100 Brescia
Tel：030 3772832

Oltreil Verde srl.
Via Udine 4
Cernusco sul Naviglio (MI)
Tel：02-92102387
Fax：02-92108911
Email：oiv@oltreil verde.com
http://www.oltrealverde.com

トスカーナ州
Franchi Bonsai VIVAI
Via Lucchese 159
51012　Ponte all'Abate, Pescia (PT)
Tel：0572-429262
Fax：0572-429008
Email：info@franchi-bonsai.it
http://www.franchi-bonsai.it

ヴェネト州
Barbazza Bonsai Srl
Via Enrico Torricelli, 1
31050 Villorba, Treviso
Tel：0422 608553
Fax：0422 609935
Email：info@barbazzabonsai.it
http://www.barbazzabonsai.it

ピエモンテ州
Fuji Sato Company snc.
Strada della Chiesa 60/a
10076　Nole (TO)

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

Tel：011-9275035
Fax：011-9235810
Email：commercial@fujisato.it
http://www.fujisato.it

Castagno Vivai E Bonsai
Via Torino 21
10041 Ceretto (TO)
Tel：0119244224
Fax：0119244223
Email：info@castagnovivai.com
http://www.castagnovivai.com
（数年前から輸入はしておらず販売のみ）

５．高松市生産者の盆栽に対する評価

（１）対象となる盆栽

高松市生産者の盆栽サンプル写真に対する聞き取り調査

№	日本名	年数	サイズ	日本国内小売価格（円）
A1	カエデ	25 年	580 × 580	50,000
A2	シンパク	20 年	430 × 540	20,000
A3	ヒノキ	15 年	220 × 300	20,000
A4	五葉松	20 年	280 × 430	40,000
A5	真弓	25 年	550 × 600	40,000
A6	五葉松	30 年	400 × 700	80,000
A7	モミジ	20 年	590 × 630	30,000
A8	柿	25 年	610 × 540	35,000
A9	トショウ	35 年	340 × 530	50,000
B1	五葉松	50 年	350 × 480	120,000
B2	五葉松	70 年	500 × 650	350,000
B3	五葉松	15 年	340 × 500	7,000

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

１）評価・コメント

①盆栽愛好会メンバー

№	日本名	1. エミリア盆栽協会（フェッラーラ）		2. ラヴェンナ盆栽愛好会	
A1	カエデ	X	価格が高い。樹形と根っこの処理と鉢があっていない。評価は低い。	○	まあまあ。価格も相応だ。
A2	シンパク	○	価格はまあいい。	X	このカーブは曲がりすぎていていやだ。バランスが悪い。鉢と幹の部分とのバランスが悪い。根っこに対して鉢が薄すぎるのではないか。
A3	ヒノキ	X	この品種は関心がない。	X	興味がない。
A4	五葉松	○	素材としてはまあまあ。	○	まあまあいい。
A5	真弓	○	根っこはいい。まあまあだ。	X	個人的には小品としておもしろいが、一般には人気はない。
A6	五葉松	X		X	これは種からだろうか。接ぎ木だろうか
A7	モミジ	X	高い。	○	価格がもう少し安ければ考える。
A8	柿	○	価格とサイズのバランスはいい。	X	柿は実がないと人気がない。
A9	トショウ	○	興味深い。これからやる作業が多いのでおもしろいかもしれない。	○	この地域は暖かいのでこの品種も栽培できる。
B1	五葉松	○	形がおもしろい。幹はきれいだ。潜在力がある。	X	素材としては不思議。価格も高いし、変に曲がっていて形がよくない。
B2	五葉松	X	価格が高いだけでなく、樹形も変だ。90 度の曲がり角がいやだ。これだと手の入れようもない。こんなもの買うはずがない。	X	こんなに曲がっていると売れない。盆栽を好きな人はこのような形は決して買わない。この価格でも本当に気に入れば買うが、こんなに醜いのは論外だ。
B3	五葉松	X	若いが大きな致命的欠点がある。鉄線を巻きすぎている。10 年たたないとこの線の跡が消えないだろう。この程度の価格ならもっといいのが沢山ある。	X	よくない。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

②盆栽輸入業者

№	日本名	1. クレスピ・ボンサイ		2. オルトレ・イル・ヴェルデ		3. フランキ・ボンサイ・ヴィヴァイ	
A1	カエデ	○	これはおもしろい。形もいいし価格も手ごろだ。	○	これはいい。 価格もOKだ。	○	これはいい。 価格もOKだ。
A2	シンパク	○	これもいい。	X	形が古くて時代遅れ。	○	盆栽愛好家が「素材」として使うのに適している。
A3	ヒノキ	X	高くて興味がない。	X	興味ない。	X	この品種は人気がないのでだめ。成長が遅いし、好まれない。
A4	五葉松	X	高くてダメ。	X	ダメ。	X	写真のせいかもしれないがこの形はダメ。
A5	真弓	X	この品種はイタリアでは受けない。	X	興味ない。	X	この品種は誰も興味がないのでダメ。
A6	五葉松	X	ダメ。	△	悪くないが高すぎる。	X	幹が太すぎてダメ。
A7	モミジ	△	まあまあだが価格が高すぎる。	△	形は悪くないが高すぎる。	X	モミジは、自社で生産するので輸入しない。
A8	柿	○	これはおもしろい。検討してみたい。	X	これは高すぎて話しにならない。	X	あまり人気がないので扱わない。
A9	トショウ	X	あまり興味がない。	X	北イタリアではうまくいかないので扱わない。	△	まあまあだが高い。
B1	五葉松	X	この五葉松はまったく関心がない。この樹形は醜くてイタリア市場ではまったく通用しない。10分の1の価格でも売れない。	X	高すぎて話しにならない。	X	これはまったくダメ。選択外。サラミのような太い部分は醜い。
B2	五葉松	X		X	この価格の五葉松を買うならもっといいのを買う。品質がよくない。	X	高いだけでダメ。選択外。美しくない。
B3	五葉松	X		X	針金の後が目立ちすぎている。これほどひどい仕上げをみると中国製ではないか。遠くからみてもお粗末な仕上がり。	X	プレボンサイ。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

№	日本名	4. ボンサイ・バルバッツァ		5. フジサト・カンパニー	
A1	カエデ	△	多少関心がある。	○	この形でこの価格であればいい。
A2	シンパク	○	これはギリギリの範囲。もっといい買い物があるはず。	X	レベルが低い。
A3	ヒノキ	X	この品種はダメ。	X	この品種は売れない。
A4	五葉松		高い。	X	ダメ。
A5	真弓	X	この品種はダメ。	X	この地域ではこの品種はダメ。
A6	五葉松	X	興味ない。	X	まったくダメ。
A7	モミジ	X	高すぎる。	△	半額程度ならばいい。
A8	柿	○	悪くはない。	○	まあまあだ。
A9	トショウ	○	悪くない。盆栽としていい出発点である。まだまだ手を入れていかなければならないが。	X	興味ない。
B1	五葉松	X	まったく売り物にならない。「素材」としては使えるがこの価格では論外だ。	X	興味ない。
B2	五葉松	X	形も価格も話にならない。	X	形が悪い。
B3	五葉松	X	中国産ではないのか。中国ではこのような手入れをしている。価格はいいが品質は最悪。	X	興味ない。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

③盆栽インストラクターなど

№	日本名	1．ジョヴァンニ・ジェノッティ氏		3．マウロ・ステンバーガー氏		4．アルフレッド・サラッチョーネ氏	
A1	カエデ	△	まあまあだ。	○	この価格であれば素材として悪くない。	○	なかなかいい。
A2	シンパク	X	興味がない。	○	アマチュアの出発点となりえる。	X	根っこが細すぎる。プレボンサイのレベル。
A3	ヒノキ	X	興味がない。	X	ダメ。この品種は興味がない。	X	この品種は高価なわりに成長が遅い。維持も難しい。愛好家は変化をみたいので好まない。
A4	五葉松	○	これは悪くない。上が重いがここに手を入れればいい盆栽にすることができる。一部を削除することでいい形になりえる。	X	美的にみてこの樹形はダメ。	○	まあまあだ。接ぎ木もあまり目立たない。緑の部分も十分にある。プレボンサイとして盆栽に育てるにはいい。
A5	真弓	○	これは悪くない。形がきちんとしている。	X	これは興味がない。	X	この樹形はイタリア人の嗜好には合わない。
A6	五葉松	X	興味がない。	X	これは興味がない。	△	盆栽講習会の教材としては使えるがそれには価格が高すぎる。
A7	モミジ	X	興味がない。	X	これは興味がない。	△	高すぎる。幅があるが幹が短い。
A8	柿	X	興味がない	X	あまり興味がない	○	これはいい。価格も競争力がある。
A9	トショウ	X	この品種は北イタリアの寒さにはあわない。この地域では売れない。	X	この地域では育たない。	X	扱うには技が必要なので愛好家は好まない。
B1	五葉松	X	興味がない。	X	まったく興味がない。	X	針金が目立ち永遠にこの跡が残るだろう。20 年前ならイタリア人も買ったかもしれないが、今は誰も買わない。日本の国風展の作品、雑誌「近代盆栽」の記事など毎月みていて最新情報を得ているし、目が肥えている。
B2	五葉松	X	価格は高いがたいした腕ではない。醜い。ベースが小さいのに幹の太い部分はサラミのようでバランスが悪い。	X	まったく興味がない。	X	高すぎて話にならない。この価格は『傑作』盆栽の価格。永遠に売れ残りになる作品。
B3	五葉松	X	安いが、針金の跡がみえている。レベルが低い。	X	まったく興味がない。	X	この針金の跡が気になる。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

JETRO

ベルギー

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

第２部　　ベルギー

１．ベルギーにおける盆栽の普及状況

・イタリアの愛好家は北部とその他地域に２極化しているが、ベルギーでも個人愛好家も含め首都や独・仏国境周辺地域にも遍く広がっており、想定では２万～３万人と見ている。

・かつてはブリュッセル市内にも盆栽を販売する店が 20 あまりあったが、現在ではドー・ヴァンリュア（Do Van Luat）氏が経営するドン・ソン盆栽教室（Ecole de Bonsais Dong Son、第２項の「輸入・取扱業者」参照）の店のみとなった。ヴァンリュア氏は盆栽の専門家として知名度が高く、フランスやカナダなど外国からも生徒になりたいという申し込みがあるという。

・ベルギーで、盆栽が盛んになり始めたのは 1970 年代、大阪万博の頃で、当時は日本から盆栽が沢山輸入されていた。まだ盆栽をきちんと手入れできるような専門家も少なかった。しかし、盆栽が盛んなるにつれ、中国や韓国などから安価な盆栽が流入するようになった。

・日本の盆栽の評価は高い。しかし、販売店は、高い日本の“完成品”を輸入するより、中国、韓国、台湾などから安い“半製品”を輸入し、自分のところで手を入れ付加価値をつけたうえで高く売るほうを好むという。高く売るため、こうした盆栽を日本から輸入した盆栽だといって販売する店もあるという。ヴァンリュア氏によると、高品質の日本の盆栽の手入れをし、育てることのできるような人は数えるほどしかいないという。

・現在、金融経済危機の煽りを受け、盆栽市場も不況だという。ヴァンリュア氏は、2011 年頃までは回復は見込めないと見ている。

・ベルギーで最も大きな盆栽の販売店は資料編リストの《Ginkgo Bonsai Center》で、ヴァンリュア氏はここで盆栽教室の講師をしたこともある。《Bauwens Bonsai》がこれに次ぐ規模の店で、ベルギーではこの２店が代表的な盆栽店。

・ヴァンリュア氏によると、前述のような商慣行もあることから盆栽に関する統計は存在しない。《Ginkgo Bonsai Center》や《Bauwens Bonsai》などでも具体的な数字を教えてくれる可能性はないとの回答であった。

２．盆栽の輸入動向

ベルギーにおける調査対象品目の「その他の生きている植物・その他のもの」（HS 番号 060292）の輸入動向をみると、2006 年の２億 1,825 万ドルから 07 年には２億 5,225 万ドル、08 年には２億 7,678 万ドルと、順調に増加した。

2008 年における上位輸入相手国の順位を見ると、首位は隣国のオランダが２億 167 万ドルと全輸入額の 72.95%を占めた。２位はイタリアの 2,090 万ドル（同 7.6%）、３位はフランスの 1,360 万ドル（同 4.9%）であった。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

表１　ベルギーの生きた植物（盆栽等）輸入動向（HS 番号 060290）

（単位：100 万ドル）

上位輸入相手国順位		2006 年	2007 年	2008 年	2008 年 構成比（%）
1	オランダ	164.9	188.2	201.7	72.9
2	イタリア	15.0	18.5	20.9	7.6
3	フランス	10.6	10.3	13.6	4.9
4	ドイツ	6.7	8.3	9.9	3.6
5	デンマーク	6.7	8.6	9.7	3.5
6	スペイン	4.6	7.5	9.4	3.4
7	イスラエル	3.5	3.2	3.4	1.2
8	英国	0.7	0.8	1.2	0.4
12	日本	0.4	0.9	0.8	0.3
	世界計	218.3	252.3	276.8	100.0

（出所）ベルギー貿易統計から作成

アジア諸国からの輸入動向をみると、首位は日本（全世界から輸入では 12 位）で 76 万ドル（同 0.3%を占める）、次いで 18 位の中国（20 万ドル）が 10 万ドル超の水準であるが、シンガポール、タイ、台湾、マレーシア、インドネシア、インド、韓国、香港からは目立った輸入はない。

表２　ベルギーの生きた植物（盆栽等）輸入動向（HS 番号 060290）

（単位：100 万ドル）

アジアから輸入相手国順位		2006 年	2007 年	2008 年
12	日本	0.36	0.89	0.76
18	中国	0.12	0.14	0.20
24	シンガポール	0.05	0.05	0.08
27	タイ	0.01	0.01	0.05
29	台湾	0.02	0.03	0.05
30	マレーシア	0.05	0.05	0.04
45	インドネシア	0.01	0.53	0.00
48	インドネシア	0.07	0.00	0.00
49	韓国	0.01	0.00	0.00
53	香港	0.04	0.00	0.00

（出所）ベルギー貿易統計から作成

３．輸入・取扱業者

主要輸入・取扱業者を訪問し、高松地域の盆栽に対する評価、現地事情などについて意見交換を行った。

（１）Ecole de Bonsais Dong Son（ドン・ソン盆栽教室、ブリュッセル市内盆栽取扱業者）
Chausee de Wavre 1360、1160 Bruxelles
TEL: 32 2 673 7549

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

http://users.skynet.be/bonsais.dongson/

＜面談者＞
・ドー・ヴァンリュア氏（Do Van Luat、創業社長）

ドン・ソン盆栽教室店舗外観

教室事務所で意見交換（右ﾞｧﾝﾘｭｱ氏）

＜店舗設立経緯など＞
・もともとは盆栽を販売する店だったが、盆栽の販売だけでは生計を立てられなくなり、盆栽教室を開くようになる。ヴァンリュア氏は、ベトナム系のベルギー人で、日本盆栽協会やベトナム盆栽協会の会員でもあり、日本に行く機会もある。

対談中のヴァンリュア氏

日本盆栽協会会員証

・ベルギーで、盆栽が盛んになり始めたのは 1970 年代、大阪万博の頃で、当時は日本から盆栽が沢山輸入されていた。まだ盆栽をきちんと手入れできるような専門家も少なかった。しかし盆栽が盛んなるにつれ、90 年頃から中国や韓国などから安価な盆栽が流入するようになり、盆栽価格の下落要因となった。

・最盛期にはブリュッセル市内で盆栽販売店舗が 20 軒余りあったが、現在では市内繁華街にヴァンリュア氏の店のみとなった。同氏は盆栽専門家として有名なようで、フランスやカナダなど外国からも生徒になりたい旨の申し出があるという。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

蔵書の一部、日本の盆栽専門書

JARDIN

L'école des bonsais

LIGATURES L'art de créer des arbres miniatures est enseigné à Bruxelles.

盆栽教室紹介の地元新聞掲載記事

＜ベルギーの盆栽事情＞

・イタリアの愛好家は北部とその他地域に２極化しているが、ベルギーでも同様に個人愛好家も含め首都や独、仏国境周辺地域にも遍く広がっており、想定では２万～３万人と見ている。

・ベルギーの気候は、年間を通じての日照期間が３カ月間であるため、盆栽を苗木から栽培・育成するには時間と手間、すなわち余計なコストが嵩んでくる。栽培コストは日本より高いと見ており、販売価格に反映され取扱業者にも良くない。

・このため、盆栽には輸入品が多いのがベルギーの特徴で、コスト削減・大量温室栽培を行うなど一般的には量販モノとなる場合が多い。特に、2000 年頃から前述の安価な中国品が出回り一般消費者はスーパーなどで手軽に購入することができたが、多くの初心者のみならずスーパーの店員も育成方法を知らないまま販売されてきたことが、店舗数減少の要因ともなった。

・日本の盆栽の評価は高い。しかし販売店は、高い日本の“完成品”を輸入するより、中国、韓国、台湾などから安い“半製品”を輸入し、自分のところで手を入れ付加価値をつけたうえで高く売るほうを好むという。高く売るため、こうした盆栽を日本から輸入した盆栽だといって販売する店もあるという。ヴァンリュア氏によると、高品質の日本の盆栽の手入れをし、育てることのできるような人は数えるほどしかいないという。

自作品

自作品

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

・このため、愛好家の中で盆栽の広報活動の柱となるよう、中核になる人材を育成することが重要である。また、日本へ向けて盆栽ツアーを行い、本物に触れる機会をつくることが指導者育成にベストな方法とみられると同氏は指摘。

・高松地域の盆栽写真をヴァンリュア氏に提示したとところ、次の様なコメントが得られた。これによると、ベルギーで最も売れる可能性の高い盆栽は写真 A2 の「真柏」。丈夫な木で、乾燥に強く、寒いベルギーの冬にも耐えられるという。このほか、A3、A4、A6、A9、B1 などが売れ筋で、A1、A5、A7、A8 は売れないという。

自作品

School of Bonsai Dong Son 看板

（２）Bauwens Bonsai（ベルギー大手盆栽取扱い業者）

Kalenbergstraat 70、700 Dilbeek
TEL: 32 2 569 2612、FAX: 32 2 569 2546
http://www.bauwensbonsai.eu/

＜面談者＞
・マーク・ボウエンス氏（Marc Bauwens、Bauwens Bonsai オーナー社長）

ボウエンス氏宅の和風山門に入る

ボウエンス氏と意見交換（右本人）

・オーナーの Bauwens 氏は、European Satsuki Bonsai Association（欧州さつき盆栽協会）の会長でもある。同協会は、EU を海外販路開拓のターゲットとする「鹿沼さつき会（栃木県鹿沼市）」と協力関係にある。なお、「鹿沼市さつき盆栽海外輸出促進協議会」は、2008 年３月にディルビークのボウエンス氏自宅庭園内で展示会を開催し、盆栽文化の紹介（パ

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

ネル展示、盆栽実演・実技指導）を行った（URL 参照）。

http://www.maff.go.jp/j/export/torikumi_zirei/zirei_2009/pdf/028.pdf
http://www.city.kanuma.lg.jp/Koho/Kaiken/kaiken_H20_01/kaiken_01_03.htm

ボウエンス氏紹介の新聞記事

ボウエンス氏の駐車中輸送トラック

＜意見交換＞

・ボウエンス氏は、中国（上海市、寧波市など）などアジア諸国への訪問も行っており、同氏は面談前日に中国からベルギーに帰国したばかりであった。

・（アジア太平洋盆栽水石大会（ASPAC）を説明したところ）2002 年に訪日した際に高松地域の盆栽生産地域を訪問したことがあるとのことであった。ASPAC 世界大会で高松市が 2011 年の誘致都市に選ばれたことは素晴らしく、将来機会があれば是非再訪問したいとの意向を表明した。

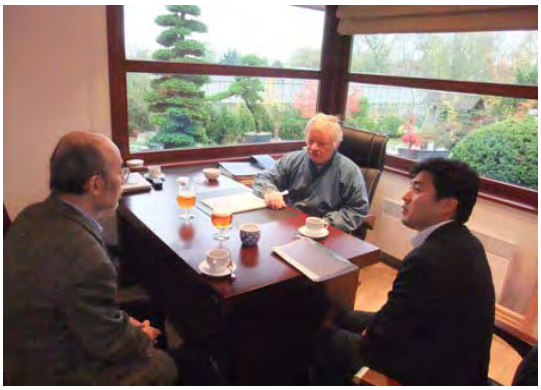
鹿沼さつき 2008 年展示会場（左、夫人）

温室内にて訪問者と意見交換

・ボウエンス氏は栃木県鹿沼市と取引があり、同市生産者とよく連絡し合っているが、2009 年は訪問していない。鹿沼市の取引先写真の新作に感銘を受けたとのこと。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

園内保管の石灯篭など



意見交換中

・（ジェトロは地方で海外食品バイヤー招聘による各地国内業者との商談会を開催し好評を博しているが、盆栽でそのような商談機会を将来開催すれば訪日する意向はあるかとの質問に対して）2009 年は無理だが、11 年を目標にして是非訪日したい。

・Ginkgo Bonsai Center（ベルギー郊外所在の大手盆栽取扱業者）の顧客はフランス、ドイツ、オランダなど外国人を主たる顧客層としている。当社も Ginkgo 社同様、外国人も顧客に有しているが、当然ベルギー国内の顧客も多い。当社の取引先は、日本、中国、韓国、台湾である。中国からの輸入品価格は、100 ユーロ、120 ユーロ、350 ユーロクラスが多い。

輸入品

輸入品

小さな高級品（2,250 ユーロ）

大きな高級品

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

・高松地域等の盆栽サンプル写真を提示したところ、ボウエンス氏から次のようなコメントが得られた。五葉松およびシンパクは基本的に受け入れられる素地がある。

サンプル番号	コメント概要
A1 （カエデ）	良い評価。
A2 （シンパク）	良い評価。
A3 （ヒノキ）	良い評価。
A4 （五葉松）	良い評価。
A5 （マユミ）	-
A6 （五葉松）	良い評価。
A7 （モミジ）	頭が大きくアンバランス、もっと小さくしないとアンバランス。
A8 （柿）	売れない。
A9 （トショウ）	不評。
B1 （五葉松）	-
B2 （五葉松）	不評（根幹が人為的に曲げられており自然に育成されていない）。
B3 （五葉松）	-

・ベルギーの盆栽作品では、葉モノも実モノも小さいのが好まれる。また、子供が好むような派手な色使いのものは不評。鉢の大きさ、色もアンバランスとならない見せ方が重要である（例えば、青色では明るいのが不評で、濃紺が好まれる）。鉢は愛知県・常滑市の陶磁器を特に気に入って取り扱っている。

整頓された鉢倉庫

園内の盆栽前で

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

４．EU での植物検疫状況

EU 市場では、日本産盆栽・庭木から害虫が発見されたため、害虫が侵入しない網室などの施設で２年間生育されたもの以外は 2008 年 10 月以降輸入規制強化の対象となった。日本の良識的な輸出盆栽業者は、EU が規制する次の様な内容に沿った対策を現在施している：

－発送前に少なくとも２年間連続して、公式に登録され、公式に管理された検査制度下にある養樹場（盆栽園）で成長し、保持され、準備されたものであること。
－地面から少なくとも 50 センチメートルの高さの棚に置かれた鉢に入れられていること。
－少なくとも上記の期間中、欧州のものではない銹病がないことを保証する適切な処置を受けていること。検疫証明書に、活性成分、濃縮物、処置の適用日を記載すること。
－年に少なくとも６回、有害な生物の存在を探査するため公式な検査を行っていること。

EU 当局が公布した基礎となる法規並びに関連法規について情報収集を行った。内容は次のとおりである。

（１）基礎となる法規

『植物あるいは植物製品に有害な生物の欧州共同体内への導入、欧州共同体内での拡散に対する保護措置に関する理事会指令 2000／29／EC』

http://eur-lex.europa.eu/LexUriServ/LexUriServ.do?uri=CONSLEG:2000L0029:20090303:EN:PDF

同指令の４条１項は、「加盟国は、アネックス III の A 部に列挙される植物あるいは植物製品が、A 部に記載される原産国のものである場合、国内に導入できない旨を規定する」と定めている。

同指令のアネックス III の A 部は、「すべての加盟国への導入を禁止しなくてはならない植物や植物製品、その他のオブジェ」を規定するもので、第１項には、「欧州以外の国々が原産国である、果実と種子を除く Abies Mill.、Cedrus Trew、Chamaecyparis Spach、Juniperus L.、Larix Mill.、Picea A. Dietr.、Pinus L.、Pseudotsuga Carr. et Tsuga Carr.の植物」が記載されている。

ただし、同指令の 15 条１項は、「加盟国は申請を行った上で、アネックス III の A 部に関し４条１項の適用免除を規定することを許可されうる」としている。

その際、以下のような要素により有害な生物の拡散のリスクが事前に除去されていることが明らかにされていなくてはならない：
－植物あるいは植物製品の原産地
－適切な処置
－植物や植物製品の使用のための特別な予防措置

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

（２）関連法規

１）『日本産で、自然にあるいは人工的に成長を抑制された Chamaecyparis Spach、Juniperus L. 並びに Pinus L.の植物のため、理事会指令 2000／29／EC の一部の規定の適用免除を許可する欧州委員会決定 2002／887／EC』
http://eur-lex.europa.eu/LexUriServ/LexUriServ.do?uri=OJ:L:2002:044:0037:0044:EN:PDF

同決定の１条は、果実と種子を除く、日本産の Chamaecyparis Spach、Juniperus L.、Pinus L. の植物のため、『理事会指令 2000／29／EC』のアネックス III の A 部１項の対象となる禁止に関し、同指令の４条１項の適用を免除する規定を設けることを加盟国に許可している。

適用免除の恩恵を受けるためには、『理事会指令 2000／29／EC』のアネックス I、II、並びに IV の A 部 I 章の 43 項の規定以外に、『欧州委員会決定 2002／887／EC』のアネックスに列挙される条件を満たさなくてはならない。

◇適用免除の恩恵を受けるために満たさなくてはならない条件
『理事会指令 2000／29／EC』のアネックスIVのA部I章の 43 項：
アネックス IV の A 部は、「植物、植物製品並びにその他のオブジェを自国の領土内に導入し、流通させるため、加盟国が課さなければならない特別な要求」に関するもので、I 章には、「欧州共同体のメンバーでない国が原産の植物、植物製品並びにその他のオブジェ」が列挙されている。

43 項の対象となるのは、「欧州以外の国の原産で、種子を除く植え付け用の自然にあるいは人工的に成長を抑制された植物」で、以下のような条件が課される：
－発送前に少なくとも２年間連続して、公式に登録され、公式に管理された検査制度下にある養樹場（盆栽園）で成長し、保持され、準備される。
－少なくとも上記の期間中、地面から少なくとも 50 センチメートルの高さの棚に置かれた鉢に入れられている。
－少なくとも上記の期間中、欧州のものではない銹病がないことを保証するための適切な処置を受けている。検疫証明書に、活性成分、濃縮物、処置の適用日を記載する。
－少なくとも上記の期間中、年に少なくとも６回、本指令のアネックスに列挙される有害な生物の存在を探査するため公式な検査を行う。
－少なくとも上記の期間中、検査の際、本指令のアネックスに列挙される有害な生物が存在しないことを確認する。汚染されている植物は除去する。その他の植物には、必要であれば適切な処置を施し、本指令のアネックスに列挙される有害な生物が存在しないことを保証するに足る期間、保存する。
－燻蒸された、あるいは適切な熱処理を施された人工的な栽培土、あるいは自然な栽培土に植えられ、後の検査で有害な生物が存在しないと宣言される。
－少なくとも上記の期間中、栽培土に有害な生物が存在しないことを保証する状態を維持する。また、発送前の２週間に以下の何れかの処置を施す：
・栽培土を除去するため、振り動かし、透明な水で洗い、根を裸の状態に維持する。
・栽培土を除去するため、振り動かし、透明な水で洗い、燻蒸されたあるいは適切な熱処理を施された栽培土に植え替える。
・有害な生物が存在しないことを保証するための適切な処置を施す。活性物質、濃縮物、処置の適用日は、検疫証明書に記載。
・公式の封印を施し、登録された養樹場（盆栽園）の登録番号を記載し、密閉されたコンテナに積み込む。登録番号は検疫証明書にも記載されるので、ロットの特定が可能になる。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

『欧州委員会決定 2002／887／EC』のアネックス：

『理事会指令 2000／29／EC』の一部の規定の適用免除の恩恵を受ける、「日本産で、自然にあるいは人工的に成長を抑制された Chamaecyparis Spach、Juniperus L.並びに Pinus L.の植物」は、以下のような条件を満たさなくてはならない：

－自然にあるいは人工的に成長を抑制された Chamaecyparis Spach、Juniperus L の植物。Pinus L.の場合は、Pinus parviflora Sieb. & amp: Zucc.(Pinus pentaphylla Mayr)の種に完全に属する植物であるか、Pinus parviflora Sieb. & amp: Zucc.以外の Pinus の種に接ぎ木された植物（台木は芽が出ていてはならない）。

－植物の総数は、検疫能力を考慮し、輸入する EU 加盟国が定めた数量を超えない。

－植物は、欧州共同体に輸出される前に少なくとも２年間連続して、公式に登録され、公式に管理された検査制度下にある養樹場（盆栽園）で成長し、保持され、準備される。登録された盆栽園の年次リストは、遅くとも毎年 10 月 31 日にまでに欧州委員会に提出する。このリストは直ちに加盟国に送付される。リストには、本決定に規定される条件に基づき、欧州共同体に発送するのに適していると判断される限りにおいて、各盆栽園で育てられる植物数を記載する。

－自然あるいは人工的に成長を抑制された Juniperus の植物、Chaenomeles Lindl.属、Crataegus L.属、Cydonia Mill.属、Juniperus L.属、Malus Mill.属、Photinia Ldl.属、Pyrus L.属の植物のための盆栽園あるいはその隣接地で、発送までの２年間育てられていたこれらの植物に関しては、年に少なくとも６回、適切な間隔をおいて、有害な生物が存在するかどうかを探るための公式検査を実施する。自然あるいは人工的に成長を抑制された Chamaecyparis、Pinus の植物、Chamaecyparis Spach 属、Pinus L.属の植物のための盆栽園あるいはその隣接地で育てられたこれらの植物に関しても、年に少なくとも６回、適切な間隔をおいて、有害な生物が存在するかどうかを探るための公式検査を実施する。

以下に列挙するものが問題となっている有害な生物：

a）Juniperus の植物に関しては：

－Aschistonyx eppoi Inouye
－Gymnosporangium asiaticum Miyabe ex Yamada et G.yamada Miyabe ex Yamada
－Oligonychus perditus Pritchard et Baker
－Popillia japonica Newman
－欧州共同体では知られていないその他のすべての有害な生物

b）Chamaecyparis の植物に関しては：

－Popillia japonica Newman
－欧州共同体では知られていないその他のすべての有害な生物

c）Pinus の植物に関しては：

－Bursaphelenchus xylophilus(Steiner & amp: Buehrer) Nickle et al.
－Cercoseptoria pini-densiflorae(Hori & amp: Nambu) Deighton
－Coleosporium paederiae
－Coleosporium phellodendri Komr
－Cronartium quercum (Berk.) Miyabe ex Shirai
－Dendrolimus spectabilis Butler
－Monochamus spp. (non European)
－Peidermium kurilense Dietel
－Popillia japonica Newman
－Thecodiplosis japonensis Uchida & amp: Inouye
－欧州共同体では知られていないその他のすべての有害な生物

検査においては、上記の有害な生物が植物に存在しないことが確認されなくてはならない。寄生されている植物は排除し、残りの植物には有効な処置を施さなくてはならない。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

－検査の際に上記の有害な生物が発見された場合は、その旨を公式に記録し、欧州委員会からの要請があった場合は、記録簿を提出する。上記の有害な生物が発見された場合、盆栽園は「公式に登録され、公式に管理された検査制度下にある養樹場（盆栽園）」のステータスを失う。欧州委員会にその旨の通知が直ちに行われ、登録は翌年にならなけらば更新されない。

－欧州共同体向けの植物は、欧州共同体に輸出される前に少なくとも２年間連続して：

・地面から少なくとも 50 センチメートル以上の高さにある棚の上、あるいはネマトーダが侵入できないコンクリートの床の上に置かれた鉢に入れる。

・検査の際に上記の有害な生物が発見されず、盆栽園は「公式に登録され、公式に管理された検査制度下にある養樹場（盆栽園）」のステータスを失っていない。

・植物が Pinus L.属に属し、Pinus parviflora Sieb. & amp: Zucc.以外の Pinus の種に接ぎ木されている場合は、健全なものであると公式に認められた台木を使用する。

・日本の植物保護当局に通知されたもので、登録盆栽園が特定でき、植え付け年度を知ることのできる、それぞれの植物に固有のマーキングで識別される。

－日本の植物保護当局は、輸送車両の封印あるいはその他の適切な措置により、盆栽園を出て、輸出のための積み込みが行われるまで、植物の識別が可能であることを保証する。

－植物に張り付いたあるいは植物と一体化した栽培土には、『理事会指令 2000／29／EC』の規定（６条、７条）に基づく、日本で発行された植物検疫証明書を添付する。証明書には、以下のような事項を記載する：

・登録された盆栽園の名称

・盆栽園を特定でき、植え付け年度がわかるのであれば、上記のマーキング

・発送前に実施された最後の処置の方法

・《補足宣言》の項目に「当該積送品は、欧州委員会決定 2002／887／EC に規定される条件に適合する」と記載。

－輸入業者は、いずれかの加盟国に搬入する前に、十分な期間を置いて加盟国の所轄当局に通知を行う。その際、以下の事項を通知する：

・植物、栽培土のタイプ

・数量

・申告された輸入日

・輸入検疫中に植物が保管される公認された場所

－EU 域内での自由流通が許可される前に、Pinus 並びに Chamaecyparis の植物を輸入する場合は３カ月間、Juniperus の植物を輸入する場合は活発な成長期である４月１日から６月 30 日までの期間、隔離栽培を行い、如何なる有害な生物も存在しないことを隔離期間中に明らかにする。各植物のマーキングがなくなったりしないよう特に注意する。

－上記の輸入のための隔離は：

・加盟国の所轄当局が監視し、公的な資格を持ち、必要な訓練を受けた者が実施する。場合によっては、専門家の支援を受ける。

・有害な生物を統御し、有害な生物の拡散のリスクを排除する形で盆栽を取り扱うのに適切かつ十分な設備を持つ公認された場所で実施する。

・各植物に対し、以下のような方法で実施される：

i）まず輸入された時点で目視による検査を行う。その後は、盆栽のタイプや隔離期間中に達する成長段階に応じて定期的に実施する。

ii）目視による検査の際に観察された症状の原因となる有害な生物を特定するため、症状に適合するテストにより実施される。

－輸入のための隔離の際、盆栽内に有害な生物が存在することが明らかになった場合、問題の盆栽を含むロットはすべて、公式な監視のもと直ちに廃棄する。

－輸入のための隔離の際に有害な生物が発見された場合、加盟国は、欧州委員会並びに他の加盟国にその旨を通知する。その場合、有害な生物が発見された盆栽が栽培されていた盆栽園は、「公式に登録され、公式に管理された検査制度下にある養樹場（盆栽園）」のステータスを失う。欧州委員会はその旨を直ちに日本に通知する。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

－加盟国において輸入のための隔離下に置かれた盆栽は、隔離期間中に有害な生物が存在しないことが明らかになっても、『理事会指令 2000／29／EC』の 10 条に規定される植物衛生パスポートが発行されるまで、欧州共同体内で移動させることはできない。同パスポートには原産国が記載される。

◇免除の適用期間

加盟国が、欧州共同体内に輸入される植物に『欧州委員会決定 2002／887／EC』の 1 条に規定される適用免除を適用できる期間は、同決定では以下の期間に限定された：

Pinus：2003 年 1 月 1 日から 2004 年 12 月 31 日まで
Chamaecyparis：2003 年 1 月 1 日から 2004 年 12 月 31 日まで
Juniperus：2002 年 11 月 15 日から 2003 年 3 月 31 日まで
2003 年 11 月 1 日から 2004 年 3 月 3 1 日まで

上記適用期間はその後、以下の『欧州委員会決定』により修正、延長された：

－『日本産で、自然にあるいは人工的に成長を抑制された Chamaecyparis Spach、Juniperus L. 並びに Pinus L.の植物に関し、決定 2002／87／EC の有効期間を延長する欧州委員会決定 2004／826／EC』
http://eur-lex.europa.eu/LexUriServ/LexUriServ.do?uri=OJ:L:2004:358:0032:0032:EN:PDF

英国の申請による延長
Pinus：2005 年 1 月 1 日から 2006 年 12 月 31 日まで
Chamaecyparis：2005 年 1 月 1 日から 2006 年 12 月 31 日まで
Juniperus：2004 年 11 月 15 日から 2005 年 3 月 31 日まで
2005 年 11 月 1 日から 2006 年 3 月 31 日まで

－『日本産で、自然にあるいは人工的に成長を抑制された Chamaecyparis Spach、Juniperus L. 並びに Pinus L.の植物に関し、決定 2002／87／EC の有効期間を延長する欧州委員会決定 2006／915／EC』
http://eur-lex.europa.eu/LexUriServ/LexUriServ.do?uri=OJ:L:2006:349:0051:0051:EN:PDF

英国の申請による延長
Pinus：2007 年 1 月 1 日から 2008 年 12 月 31 日まで
Chamaecyparis：2007 年 1 月 1 日から 2008 年 12 月 31 日まで
Juniperus：2006 年 11 月 1 日から 2007 年 3 月 31 日まで
2007 年 11 月 1 日から 2008 年 3 月 31 日まで

－『日本産で、自然にあるいは人工的に成長を抑制された Chamaecyparis Spach、Juniperus L. 並びに Pinus L.の植物に関し、決定 2002／87／EC の有効期間を延長する欧州委員会決定 2008／826／EC』
http://eur-lex.europa.eu/LexUriServ/LexUriServ.do?uri=OJ:L:2008:290:0025:0025:EN:PDF

英国の申請による延長（直近の修正で、2008 年 11 月 1 日から適用されている）。
Pinus：2008 年 11 月 1 日から 2010 年 12 月 31 日まで
Chamaecyparis：2008 年 11 月 1 日から 2010 年 12 月 31 日まで
Juniperus：2008 年 11 月 1 日から 2009 年 3 月 31 日まで
2009 年 11 月 1 日から 2010 年 3 月 31 日まで

2 『Gibberella circinata Nirenberg & O'Donnell の欧州共同体内への侵入、欧州共同体内での拡散を回避するための緊急暫定措置に関する欧州委員会決定 2007／433／EC』

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

http://eur-lex.europa.eu/LexUriServ/LexUriServ.do?uri=OJ:L:2007:161:0066:0069:EN:PDF

スペインは 2006 年６月 16 日、イベリア半島北部で Gibberella circinata Nirenberg & O'Donnell の存在が確認され、５月 26 日に公的な措置を講じた旨、欧州委員会並びに他の加盟国に通知した。

Gibberella circinata Nirenberg & O'Donnell は、有害な生物として『理事会指令 2000／29／EC』のアネックス I、II に記載されていないが、科学的情報に基づく衛生上のリスクの評価によると、Pinus spp.の種や Pseudotsuga menziesii.の種の木に被害をもたらす。これらの植物は、欧州に多く存在する。このため直ちに暫定的な対策を講じる必要が生じた。

－Pinus L.属並びに Pseudotsuga menziesii.の種の植物の欧州共同体内への導入は、以下のような要求を満たす場合にのみ許可される：

・域外国産の上記の植物は、『理事会指令 2000／29／EC』の 13 条１項に規定される植物検疫証明書が添付されており、証明書の《補足宣言》の項目において、植物が公認された生産場所から送られたもので、原産国の国立植物保護機関によって検査されたものであることを保証する。

・植物は、Gibberella circinata Nirenberg & O'Donnell の存在が知られていない国で常に栽培されていたことを保証する。

あるいは、植物は、植物衛生措置の国際基準に従い、原産国の国立植物保護機関が定めた Gibberella circinata Nirenberg & O'Donnell に汚染されていないゾーンで常に栽培されていたことを保証する。

あるいは、植物は、輸出前の２年間に実施された公式検査の際に Gibberella circinata Nirenberg & O'Donnell が存在する如何なる徴候も観察されなかった生産場所から送られてきたことを保証する。

－加盟国は毎年、Gibberella circinata Nirenberg & O'Donnell の存在を探り、植物が Gibberella circinata Nirenberg & O'Donnell に汚染されている証拠を発見するための公式調査を実施する。調査結果は毎年、遅くとも 12 月 15 日までに欧州委員会並びに他の加盟国に通知する。

－遅くとも 2008 年３月 31 日までに、加盟国が実施した公式調査などの結果を踏まえ、本決定に規定されている措置の見直し＊を行う。

＊見直し

－2008 年２月 26～27 日に開催された常設植物衛生委員会（Standing Committee of Plant Health）：

欧州委員会の保健・消費者総局の F 局（食品・獣医局：Food and Veterinary Office）は、Gibberella circinata（pitch canker）の存在に関する加盟国が 2007 年度に実施した調査を概観する最初のレポートを提出。レポートによると、菌の増殖巣（fungus foci）はスペインの北部、北西部の地方にある養樹場であるが、同国の森林、公園、庭園などでは増殖は観察されていない。常設植物衛生委員会は、Pinus L.並びに Pseudotsuga menziestii の pitch canker に対する撲滅措置は、そのまま維持すべきとの結論に達した。

http://ec.europa.eu/food/fs/rc/scph/sum_2627022008_en.pdf

－2009 年３月 26～27 日に開催された常設植物衛生委員会：

保健・消費者総局の E1 課（バイオテクノロジー・植物衛生）は、加盟国によるモニタリングの結果に基づく全体像を提示した。フランスは、米国のニューメキシコからの種子の積送品中に pitch canker が発見されたと報告。一方、イタリアは、Apulia 地方に pitch canker が存在するという報告に異議を唱えた。常設直物衛生委員会は当面、『欧州委員会決定 2007／433／EC』に規定される既存の緊急措置を継続することを認めた。

http://ec.europa.eu/food/fs/rc/scph/sum_2627032009_en.pdf

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

３）『Anoplophora chinensis（Foster）の欧州共同体内への侵入、欧州共同体内での拡散を回避するための緊急措置に関する欧州委員会決定 2008／840／EC』
http://eur-lex.europa.eu/LexUriServ/LexUriServ.do?uri=OJ:L:2008:300:0036:0041:EN:PDF

イタリアは 2007 年 11 月 23 日、ロンバルディア地方において種々の植物からゴマダラカミキリ［Anoplophora chinensis（Foster）］が発見されたことに伴い、11 月 9 日にゴマダラカミキリの国内への新たな侵入、国内での拡散を回避するために追加措置を採択した旨、欧州委員会並びに他の加盟国に通知した。

オランダでも種々の植物からゴマダラカミキリが発見されたことから、オランダは 2008 年 1 月 21 日、その旨を欧州委員会並びに他の加盟国に通知した。

オランダはまた、「欧州共同体内にゴマダラカミキリが定着する可能性は非常に高く、幾つかの植物に関しては、経済的な損害が発生するリスクも高い」とするゴマダラカミキリによる衛生上のリスクに関する評価を 2008 年に発表した。

こうした状況から欧州委員会は、ゴマダラカミキリの欧州共同体内への侵入、欧州共同体内での拡散を防止するための緊急措置の採択が必要と判断した。

－緊急措置の対象となるのは、以下の種に属する植物（種子は除く）：
Acer spp.、Aesculus hippocastanum、Alnus spp.、Betula spp.、Carpinus spp.、Citrus spp.、Corylus spp.、Cotoneaster spp.、Fagus spp.、Largerstroemia spp.、Malus spp.、Platanus spp.、Populus spp.、Prunus spp.、Pyrus spp.、Salix spp.、Ulmus spp.

－上記の種の植物の、ゴマダラカミキリの存在が知られている域外国からの欧州共同体内への導入は、以下の要求を満たす場合に限り可能となる：

①『理事会指令 2000／29／EC』の 13 条に規定される植物検疫証明書が添付されており、証明書の《補足宣言》の項目において、以下のようなことを保証する：

a）植物は、ゴマダラカミキリに汚染されていないゾーンにある場所で常に栽培されていた。同ゾーンは、植物衛生措置の国際基準に従い、原産国の国立植物保護機関によって制定される。《原産地》の項目には、ゾーンの名称を記載する。

あるいは、

b）植物は、少なくとも輸出前の２年間、植物衛生措置の国際基準に従い、ゴマダラカミキリに汚染されていないと宣言された生産場所で栽培されていた。

i）生産場所は登録され、原産国の国立植物保護機関によって監視されている。

ii）生産場所は毎年、適切な時期に実施される、ゴマダラカミキリの存在するあらゆる徴候を探る２回の公式検査の対象となった。公式検査では、ゴマダラカミキリの存在を示す如何なる徴候もなかった。

iii）生産場所において植物は：

-ゴマダラカミキリの侵入に対する完全な物理的保護を施された施設で栽培された。

-ゴマダラカミキリに対する適切な予防処置が実施されている施設で栽培された。また、植物は、ゴマダラカミキリの存在あるいは存在する徴候を探ることを目的とした公式検査が毎年、適切な時期に実施される、少なくとも半径２キロメートルの緩衝ゾーンに囲まれている施設で栽培された。ゴマダラカミキリが存在する徴候が観察された場合、緩衝ゾーンが再びゴマダラカミキリに汚染されていないゾーンとなるよう直ちに撲滅のための措置を講じる。

iv）生産場所において、輸出の直前、出荷の際にゴマダラカミキリの存在を探るための綿密な検査を公式に実施する。特に植物の根、幹に注意する。必要であれば、検査には破壊サンプリング（destructive sampling）が含まれる。

②植物が欧州共同体内に持ち込まれる際、ゴマダラカミキリの存在を探るための検査の対象となった。検査は、所轄当局によって実施され、ゴマダラカミキリが存在する如何なる徴候も観察されなかった。植物は、欧州共同体に導入される場所、あるいは『欧州共同体に植物が導入される場所とは異なる場所、あるいは隣接する場所で行われる可能性のある、理事会指

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

令 2000／29／EC のアネックス V の B 部に記載される植物、植物製品、その他のオブジェの識別検査、検疫、並びに検査を規定する条件の制定に関するに関する欧州委員会指令 2004／103／EC』＊に従い定められた仕向地において綿密な検査を受ける。使用される検査方法は、ゴマダラカミキリの存在のあらゆる徴候の発見を保証するものでなくてはならない。特に植物の根、幹に注意する。必要であれば、検査には破壊サンプリング（destructive sampling）が含まれる。

＊『欧州委員会指令 2004／103／EC』
http://eur-lex.europa.eu/LexUriServ/LexUriServ.do?uri=OJ:L:2004:313:0016:0020:EN:PDF

③ゴマダラカミキリの存在が知られている域外国から欧州共同体に輸入された上記の植物は、植物衛生パスポートが添付されている場合にのみ、欧州共同体の領土での移動が可能になる。
④加盟国は毎年、ゴマダラカミキリの存在を探り、ゴマダラカミキリが植物に侵入している証拠を発見するための公式調査を実施する。調査結果は毎年、遅くとも 4 月 30 日までに欧州委員会並びに他の加盟国に通知する。
⑤遅くとも 2009 年 5 月 31 日までに、加盟国が実施した公式調査などの結果を踏まえ、本決定に規定されている措置の見直し＊を行う。

＊見直し
・2009 年 5 月 26～27 日に開催された常設植物衛生委員会：
欧州委員会の保健・消費者総局の F 局（食品・獣医局：Food and Veterinary Office）は、『欧州委員会決定 2008／840／EC』の規定に従い加盟国が 2008 年度に実施した調査の概観を提出。ゴマダラカミキリは、イタリアの限定された地域で発見されたほか、オランダ、リトアニア、英国で大発生した。
http://ec.europa.eu/food/fs/rc/scph/sum_2627052009_en.pdf
・2009 年 6 月 25～26 日に開催された常設植物衛生委員会：
Anoplophora chinensis に関する中国の状況について討議が行われた。保健・消費者総局の E1 課は、欧州委員会並びに EU 加盟国の懸念を伝える書簡が中国に送付される旨を常設植物衛生委員会に伝えた。加盟国では、中国からの積送品からの Anoplophora chinensis の発見が相次いでいる。常設植物衛生委員会は、加盟国からの Anoplophora chinensis 発見の通知がまだ続くようであれば、保護措置の再強化が必要になるとの見解を示した。
『欧州委員会決定 2008／840／EC』の規定する緊急措置に関する討議も行われたが、常設植物衛生委員会は、既存の措置を修正する必要はないとの見解を示した。
http://ec.europa.eu/food/fs/rc/scph/sum_2526062009_en.pdf

◇日本への視察団の派遣
欧州委員会の保健・消費者総局の F 局（食品・獣医局：Food and Veterinary Office）は 2008 年度に、EU に輸出するための盆栽タイプの植物の公式検査や適合性証明のシステムの評価を行うため、日本に視察団を派遣した。
視察団によると：
－システムは存在するものの、その適用は、輸出される盆栽に有害な生物が存在しないことを完全に保証するものではなかった。
－EU への輸出を認められる日本の養樹場のリストは更新されておらず、日本にリストの更新を求める必要がある。
http://ec.europa.eu/food/fs/rc/scph/sum_0910032009_en.pdf
http://ec.europa.eu/food/fs/rc/scph/sum_2627032009_en.pdf

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

（３）関連部局

１）EU（欧州委員会）
◇常設植物衛生委員会（Standing Committee of Plant Health）
◇保健・消費者総局（SANCO）
・E 局（食物連鎖の安全 : Safety of the food chain）の E1 課（バイオテクノロジー・植物衛生）
E1-001：植物衛生／有害な生物
・F 局（食品・獣医局：Food and Veterinary Office）の F4 課（植物性食品・植物衛生）

Belliard 100
rue Breydel 4
1040 Bruxelles
TEL: 32 2 295 7403（代表）

２）ベルギー
◇連邦食物連鎖安全庁（AFSCA）
・検査政策総局の植物保護・植物製品安全局
WTC III
Boulevard Simon Bolivar 30
1000 Bruxelles
BELGIQUE
TEL: 32 2 211 8616
FAX: 32 2 211 8630

http://www.afsca.be/organigramme/politiquedecontrole.asp
http://www.afsca.be/organigramme/_documents/2008-09-01_PCCB-orga-S1_fr.pdf

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

５．ベルギーにおけるまとめと課題

・ベルギーは、イタリアより北方でブリュッセルが北緯 51 度近辺で極東ロシア・サハリン島のほぼ中程に相当する緯度に位置しているため、厳しい気候環境のもと１年間の日照期間がわずか３カ月間と、栽培上の大きな制約要因となっている。このため、日本と同様な栽培にはコスト面での負担が厳しいため輸入品がほとんどであり、安価品（主に中国品）と高級品（日本品）の２極化市場となっている。

・ベルギーでは現在、全国に２万～３万人の盆栽愛好家が存在しているといわれる。European Satsuki Bonsai Association（EBA、欧州さつき盆栽協会）を始めとするベルギー盆栽愛好クラブは 14 件確認されており、想像以上に愛好者が多いことが判明した。EBA の会長であり、親日家の盆栽業者ボウエンス氏と面談でき日本における今後の海外盆栽バイヤー招聘商談会（仮称）開催に向けた準備のきずなができた。

・陸地続きの国境を控えているため、取扱業者はドイツ、フランス、オランダなど周辺国にも顧客を擁しており、EU 市場の懐の深さが印象的であった。一般の消費者は、100～300 ユーロレベルの輸入品を利用し個人の様々なライフスタイルに溶け込ませているが、ベルギー周辺の外国人顧客は高級品を指向している。

・EU 市場では、日本産盆栽・庭木から害虫が発見されたため、害虫が侵入しない網室などの施設で２年間生育されたもの以外は 2008 年 10 月以降輸入規制強化の対象となった。日本の良識的な輸出盆栽業者は、EU が規制する次の様な内容に沿った対策を現在施している：

－発送前に少なくとも２年間連続して、公式に登録され、公式に管理された検査制度下にある養樹場（盆栽園）で成長し、保持され、準備されたものであること。

－地面から少なくとも 50 センチメートルの高さの棚に置かれた鉢に入れられていること。

－少なくとも上記の期間中、欧州のものではない銹病がないことを保証する適切な処置を受けていること。検疫証明書に、活性成分、濃縮物、処置の適用日を記載すること。

－少なくとも年に６回、有害な生物の存在を探査するため公式な検査を行っていること。

・栃木県鹿沼市並びに高松地域の生産者は、前述規定に沿った盆栽栽培・育成を行っており（ちなみに鹿沼市生産者の網室メッシュは 1.2 ミリメートルと生育環境上はぎりぎりの状況）、2 年後の ASPAC 高松大会を睨んで国内生産者間で検疫情報を共有するなど準備を周到にしておけば、大会交流時に大きな成果が期待される。

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

資料編（ベルギー）

１．輸入・取扱業者リスト

◇Ginkgo Bonsai Center
Heirweg 190
9270 Laarne
TEL: 32 9 355 1485
FAX: 32 9 355 2615
http://www.ginkgobonsai.be/

・ベルギーでは最大級の業者。１万 7,000 ユーロの Pinus parvifora（Moyogi style、オーナーの Dany Use 氏のプライベート・コレクション）といった高価なものを多く扱っている。
取扱商品の価格と写真は次の URL を参照：http://www.ginkgobonsai.be/bonsai.htm
・展示会《Ginkgo Award》を主催
・盆栽教室を開催：-Kwabe school、-Dany Use Bonsai school

◇Bauwens Bonsai
Kalenbergstraat 70
1700 Dilbeek
TEL: 32 2 569 2612
FAX: 32 2 569 2546
http://www.bauwensbonsai.eu/

・オーナーの Marc Bauwens 氏は、European Satsuki Bonsai Association の会長でもある。同協会は、EU を海外販路開拓のターゲットとする「鹿沼さつき会」と協力関係にある。なお、「鹿沼市さつき盆栽海外輸出促進協議会」は、2008 年３月にベルギーで展示会を開催した。
http://www.maff.go.jp/j/export/torikumi_zirei/zirei_2009/pdf/028.pdf
http://www.city.kanuma.lg.jp/Koho/Kaiken/kaiken_H20_01/kaiken_01_03.htm

◇Groendekor Tuincentrum
Bergensestennweg 408
Sint-Pieters-Leeuw
TEL: 32 2 334 9550
FAX: 32 2 331 1453
http://WWW.GROENDEKOR.COM/Portaal.aspx
http://WWW.GROENDEKOR.COM/Products.aspx?SUB=221

◇‘t VEERLE
Groot Veerle 31
2960 Brecht
TEL: 32 3 313 0777
FAX: 32 3 313 7666
http://www.vijvertuinen-tveerle.be/BonsaiSite/index.htm

以下のような Workshop、museum を併設：
・Workshop Abe

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

http://www.vijvertuinen-tveerle.be/BonsaiSite/workshop_abe.htm
・Workshop Marc
http://www.vijvertuinen-tveerle.be/BonsaiSite/workshop_noelanders.htm
・Bonsai museum
http://www.vijvertuinen-tveerle.be/BonsaiSite/museum.htm

◇Sugi Bonsai
Meir 51
1840 Steenhuffel – Londerzeel
TEL: 32 52 30 30 44
http://www.sugibonsai.be/

◇Noya-En Bonsai
Houthalenseweg 147
3520 Zonhoven
TEL/FAX: 32 11 817444
http://www.noya-en.eu/

２．盆栽愛好家グループ

◇European Bonsai Association（EBA）
http://www.ebabonsai.com/

EBA のメンバー：
http://www.ebabonsai.com/?kat=28&xkat=13

◇ベルギー盆栽クラブ協会（Association of Belgian Bonsai Clubs）
Baaskouter 14
1730 Asse
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/homefr.htm

同協会は 2009 年 10 月 17、18 の両日、展示会を開催：
http://bonsai-abbc-belgium.be/frans/evenements.htm

◇Brussels Bonsai Club
http://www.brussels-bonsai-club.be/

◇Bonsai Club Yamadori
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club06.htm
http://users.telenet.be/bonsai.yamadori/

◇Ikeda Belgische Bonsai Club
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club09.htm
http://blog.seniorennet.be/ikeda_bonsai_club/

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

◇Kei Bonsai Kai
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club10.htm

◇Julgans Dendermonde
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club04.htm
http://www.bonsaiateljee.be/cursusaanbod.htm

◇Bonsai Club Iris
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club10.htm
http://membres.lycos.fr/bonsairis/

◇Mechelse Bonsai Club
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club12.htm
http://www.mechelsebonsaiclub.eu/home.html

◇VBV Antwerpen
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club15.htm
http://www.vlaamsebonsai.be/

◇VBV Waasland
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club16.htm

◇Bonsai Zoutleeuw Chowa
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club07.htm

◇Bonsai Club Caroloregien
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club02.htm

◇Ecole Interregio du Bonsai
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club08.htm

◇Kyoshitsu
http://www.bonsai-abbc-belgium.be/frans/club11.htm

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.

平成 21 年度

欧州地域（イタリア、ベルギー）における盆栽輸出可能性調査

発行　　2010 年 3 月

発行所　日本貿易振興機構（ジェトロ）

農林水産部 農林水産調査課

東京都港区赤坂 1-12-32

電話　03（3582）5186

©JETRO（無断転載を禁じます）

Copyright (C) 2010 JETRO. All rights reserved.